真理の実践で"Supermanに!

◉故事成語がズバリわかる!【荀子編②】

もっと智慧のわく本4.

真理の御魂
最聖麻原彰晃尊師

◉故事成語がズバリわかる！【荀子編②】

もっと智慧のわく本 4.

真理の御魂
最聖 麻原彰晃尊師

はじめに

いよいよ『もりもり智慧のわく書』も四巻目を迎えた。わたしの荀子に対してとる態度は、絶えず一定している。つまり、真理の法則から見て足りない部分は足りないとはっきりと断言し、逆に真理の法則どおりである部分は称賛するといった態度をとり続けている。

もちろん、わたし自体の学識の不足等によって、荀子の説いている内容のすべてを完全に解説し切っているかどうかについては、読者諸氏にその判定を委ねたいと考えている。しかし、少なくとも、わかりづらい故事成語の内容が現代の日本人にわかりやすく解説され、それによって日々の生活に大きな利益が与えられるならばなあという思いで、この本を刊行していることは事実である。

この『もりもり智慧のわく書』が十冊、二十冊、百冊となり、これを読む人の智慧がどんどん増大し、そしてよりよい人生を歩いてくれるならば、わたしの大いなる喜びとなるであろう。

なお、この『もりもり智慧のわく書』は、弟子のヴァンギーサに多くの助力を得ている。この『もりもり智慧のわく書』が彼の功徳となり、それによって、彼がより偉大な智慧へ至ることができるならば、わたしは最高の幸せを感じるに違いない。

麻原彰晃

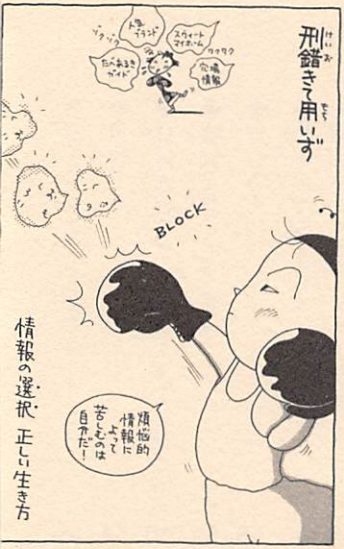
もりもり智慧のわく書 4.

【荀子編②】

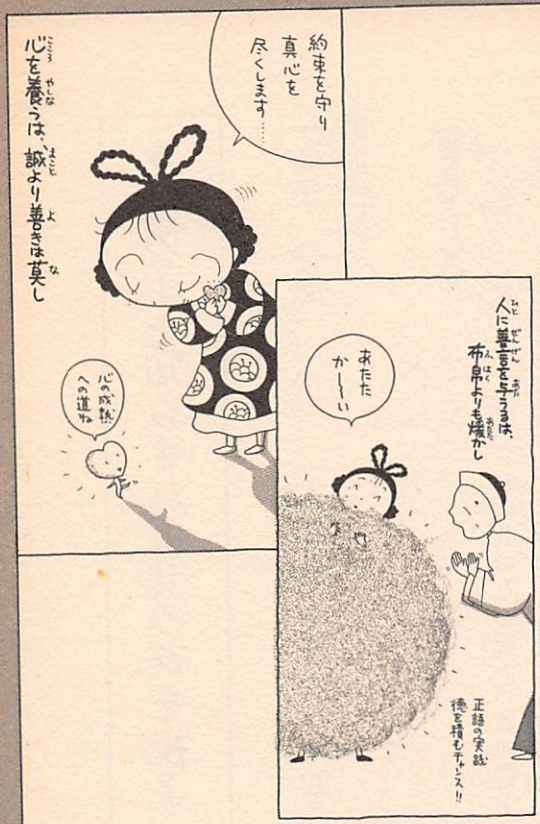
◆其の子を知らざれば其の友を視よ……8
◆麻中の蓬……12
◆越人は越に安んじ、楚人は楚に安んず……16
◆慶者堂に在り、弔者閭に在り……20
◆人に贈るに言を以てするは、金石珠玉よりも重し……24
◆人に善言を与うるは、布帛よりも煖かし……28
◆諫めを拒み非を飾る……32
◆造父は其の馬を窮めず……36
◆禽犢……44
◆目は両視すること能わずして明なり……48
◆膾蛇足無くして飛ぶ……52
◆刑錯きて用いず……56
◆微を以て明を知る……60
◆錐刀を以て泰山を堕つ……64
◆冥冥の志……68
◆学は之を行うに至りて止まる……72

◆礼の三本……88
◆卵を以て石に投ず……92
◆堯は長にして舜は短なり……96
◆駑馬も十駕……102
◆衢道を行く者は至らず……106
◆盤石の安……110
◆騏驥も一躍に十歩すること能わず……114

◆一曲に蔽われて、大理に闇し……76
◆心を養うは、誠より善きは莫し……80
◆源清ければ則ち流れ清し……84



◆勝を急にして、
敗を忘るること無かれ……118
◆游魚出でて聴く……122
◆君子は物を役し、
小人は物に役せらる……126
◆同声異俗……130



●編集スタッフ
聖者ヤソーダラー最上善逝
聖者マンジュシュリー・ミトラ智徳成就者
聖者マハーナーマ化身成就師
聖者ヴァンギーサ上流師
聖者タントラバッダー到達光正師
瓦吹英宣
●イラストレーション
片桐りえ
●カバー・デザイン
スワミ・タントラスバー
●題字
スワミ・ヴァラカツ

❖其の子を知らざれば其の友を視よ

［荀子、性悪］　伝曰、「不知其子視其友。不知其君視其左右。」靡而已矣。

【書き下し文】

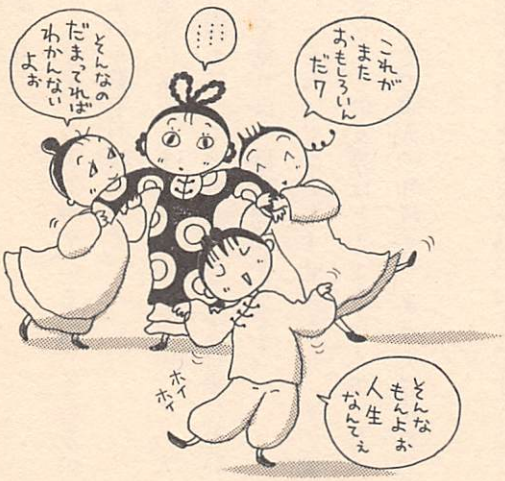
伝に曰く、「其の子を知らざれば其の友を視よ。其の君を知らざれば其の左右を視よ」と。靡のみ。靡のみ。

【訳】

古伝にいうには、

「その子の人柄がわからなければ、その友達を見なさい。その君主がわからなければ、

その側近を見なさい」と。
ただ環境による影響を受けているだけなのである。



今日の故事成語は「其の子を知らざれば其の友を視よ」。

これは、その人の人格を測るためには、どのような友とつきあっているか、その友の性質、あるいは能力を見るのが最も早道であるという荀子の教えです。

この考え方は、わたしも大変好きで、そして実際に活用します。なぜならば、その人の知的レベル、あるいはその人がどのような人生観を持っているか、そして将来においてその人が成功するのかしないのか等は、その友を見れば一目瞭然だからです。

つまり、その対象となる人と二十四時間一緒にいるわけではありませんから、その場合、その人がどのような友達と話を好むのか、そしてその友達はどのような人生における考え方を持っているのか等を知ることによって、その本人の知性や、あるいは性格等を知ることができるのです。

したがって、もしあなたが真に高い世界を目指すなら、よき友を持つべきです。これは仏典でもそのようにうたわれています。そしてよき友とは何か。それは真理の実践者であり、そして覚者なのです。

あなたが望むなら、わたしはあなたのよき友となることができます。

其の子を知らざれば其の友を視よ
よき友とは……
さぁ 真理の実践をしましょ
楽しまなきゃソンよねぇ

❖麻中の蓬（まちゅうのよもぎ）

［荀子、勧学］　蓬生麻中、不扶而直。

【書き下し文】

蓬（よもぎ）麻中（まちゅう）に生ずれば、扶（たす）けずして直（なお）し。

【訳】

曲がった蓬（よもぎ）も麻の中に生えると、支えがなくても真っすぐになる。

麻中の蓬

今日の故事成語は「麻中の蓬」です。

麻中の蓬とは、麻の中に生育された蓬、――つまり真っすぐに伸びた麻の中に、普通だったら曲がる蓬が真っすぐに成長しているさまを表わしています。これは、どんな悪人でも、正しい生き方をしている人たちと交わることにより正しくなるという教えです。

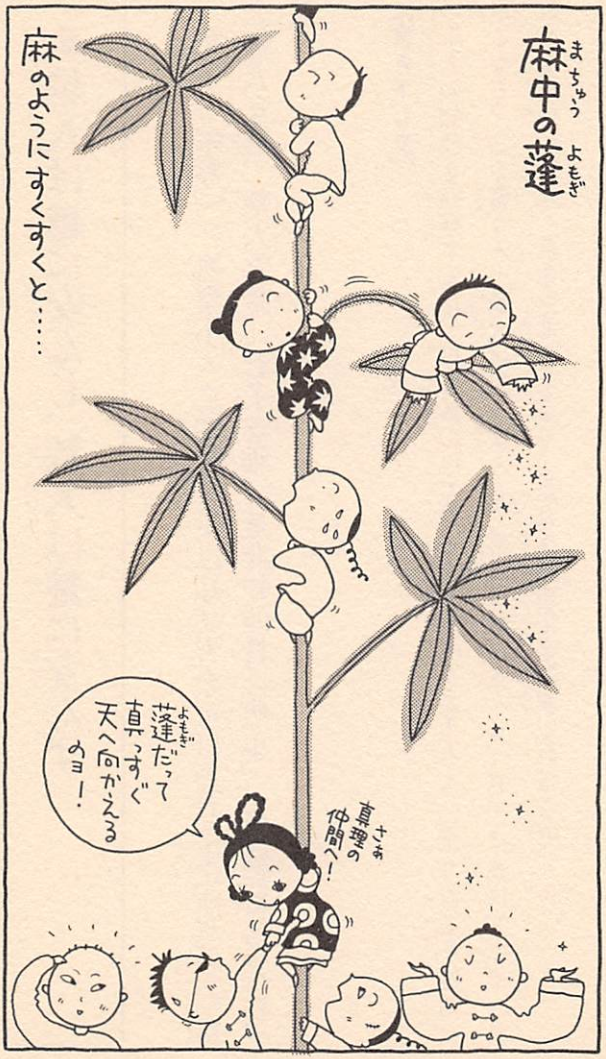
これはまさに真理の実践、真理の考え方と一致します。

つまり、真理の第一条件は三宝に対する帰依です。三宝とは、グル、すべての真理勝者方、すべての覚者方、これが第一。第二は、そのグル、真理勝者、覚者方のお説きになった真理の法則に帰依をする。これが第二。そして第三は、その真理を実践している集いに帰依をするということです。ここでいう帰依とは、その人たちにまみえ、あるいはその法則にまみえ、そしてその教えを聞き、実践するということです。

こうなると、これはまさに荀子の説く「麻中の蓬」ではありませんか。

あなたも今、人生において苦しんでいたとしても、それに対してくよくよする必要はありません。あなたがこの「麻中の蓬」のことわざを肝に銘じ、そして今日から真理の仲間入りをするならば、あなたも必ずや麻のようにすくすくと真理を背景として天へ向

かって伸びていくはずです。



❖越人は越に安んじ、楚人は楚に安んず

［荀子、栄辱］　熟察小人之知能、足以知其有余可以為君子之所為也。譬之越人安越、楚人安楚、君子安雅。是非知能材性然也。是注錯習俗之節異也。

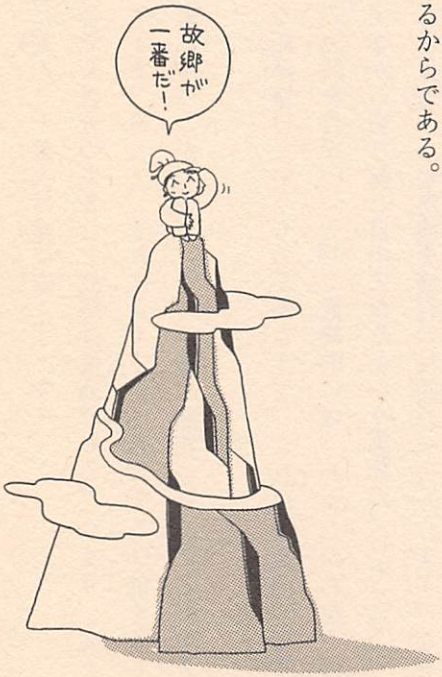
【書き下し文】

小人の知能を熟察するに、以て其の以て君子の為す所を為すべきに余り有るを知るに足るなり。之を譬うるに越人は越に安んじ、楚人は楚に安んじ、君子は雅に安んず。是れ知能材性の然らしむるに非ざるなり。是れ注錯習俗の節異なればなり。

【訳】

小人の知能をよく観察してみると、君子の行為と同じ行為をする能力が十分にあることがよくわかる。

たとえてみれば、越の人は越の国に安住し、楚の人は楚の国に安住し、君子は中央の国に安住するようなものである。これは、知能や生まれつきの性質が違うからではなく、身の処し方や習慣が異なっているからである。



今日の故事成語は「越人は越に安んじ、楚人は楚に安んず」です。

この故事成語は、どんな片田舎でも自分の生まれた故郷は最高である。つまり、人々は必ず自分の生まれた故郷に執着する。そして、それによっていくら偉大な才能を有していたとしても、その土地から離れることができず、その才能を開花させることができないというたとえです。

ところで、真理の実践における托鉢修行というものがあります。これは歩き回って生活をしながら法則を学び、法則の実践を行ない、そして最終的には、わたしたちをこの現象界に結びつけるすべてのきずなから切り離し自由になるという実践のプロセスです。

この実践において、わたしたちは土地からの解放を修行の目的の一つとします。なぜ土地から解放されるのか。それは、人間が土地、あるいはその他を含めた多くのものにとらわれると、それによってその人の本来持っている智慧が開花しないからです。これはまさに荀子の説く内容と一致します。

したがって、皆さんも土地をはじめとするいろいろなとらわれに早く気づき、それを乗り越えていただきたいものです。

越人は越に安んじ、楚人は楚に安んず
わしのもの
離れたくない
ひーふーみー
とらわれをのりこえると智慧の花が咲く

❖慶者堂に在り、弔者閭に在り

［荀子、大略］　下卿進曰、「敬戒無怠。慶者在堂、弔者在閭。禍与福鄰、莫知其門。務哉、務哉、万民望之。」

【書き下し文】

下卿進みて曰く、「敬戒して怠ること無かれ。慶者堂に在りて、弔者閭に在り。禍と福とは鄰して、其の門を知ること莫し。務めよや、務めよや、万民之を望む」と。

【訳】

下卿（警察を司る長官）が進み出ていうには、

「慎み戒めて怠ってはなりません。祝い客が堂内にいるのに、弔い客が門口に来ていま

す。このように災難と幸福とは隣り合っていて、どれが災難の門でどれが幸福の門であるかは判別できません。どうぞしっかりとお務めください。これこそ万民の待望するところです」と。

今日の故事成語は「慶者堂に在り、弔者閭に在り」です。

これは「人間万事塞翁が馬」と同じ意味で、喜びの裏には苦しみがある。したがって、喜びにも苦しみにも頓着するべきではないと説く荀子の、まさに仏教的考え方ということができるでしょう。

しかし、わたしは荀子の考え方をもう一歩進めてあなた方に提言したい。それは、今わたしたちが味わっている喜びや苦しみ、あるいは幸福や災いというものは、すべて過去の原因、そして条件による結果として今成立しているものである。したがって、今のこの幸福や災いに対しては頓着するべきではない。——ここまでは同じです。

そして、頓着せず、ひたすら善の実践、徳の実践、心を静める実践、そして法則にかなった実践を行なうべきです。なぜならば、それによってのみ未来の幸福が約束されるのですから。

慶者堂に在り、弔者閭に在り
未来をつくりあげるのは今この瞬間だ!!
善
徳
法
寂静

❖人に贈るに言を以てするは、金石珠玉よりも重し

［荀子、非相］　君子之於言也、志好之、行安之、楽言之、故君子必弁。凡人莫不好言其所善、而君子為甚。故贈人以言、重於金石珠玉、観人以言、美於黼黻文章、聴人以言、楽於鐘鼓琴瑟。故君子之於言無厭。鄙夫反是。

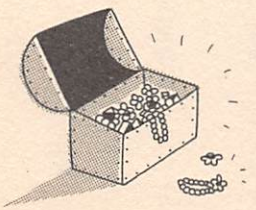
【書き下し文】

君子の言に於けるや、志　之を好み、行い之に安んじ、楽しみて之を言う、故に君子は必ず弁ずるなり。凡そ人は其の善くする所を言うを好まざる莫し、而して君子は甚だしと為す。故に人に贈るに言を以てするは、金石珠玉よりも重く、人に観すに言を以てするは、黼黻文章よりも美しく、人に聴かしむるに言を以てするは、鐘鼓琴瑟よりも楽し。故に君子の言に於けるや厭くこと無し。鄙夫は是に反す。

【訳】

君子は言説に対して、心からこれを好み、行為の上でこれに安んじ、楽しんでこれを言う。したがって、君子は必ずよく弁説するのである。

人はだれでも自分が善いと思うことを言うのが好きでないことはないが、君子は特にそうである。つまり、君子が人に善い言葉を贈るのは、貴金属や宝石類よりも貴重であり、人に善い言葉を示すのは、美しい綾模様よりも美しいし、人に善い言葉を聴かせるのは、妙なる音楽よりも楽しいのである。したがって、君子の言説については飽きることがないが、卑俗な男はその反対である。



今日の故事成語は「人に贈るに言を以てするは、金石珠玉よりも重し」です。

これは、聖者や、あるいは君子が、人々に対して善言、あるいは心のこもった言葉を贈るということは、貴金属などに比べてよっぽど価値のあることであるということです。荀子はこれについて表面的な説明をしていますが、わたしは少し深く解説をしたいと思います。

もし聖者や君子が相手のためを思い、そして善を行なわせる、あるいは徳を行なわせるような、相手に対して導きの言葉を発したとするならば、その魂はそれによって人生の苦しみから解放されますし、また、ある場合には大いなる財を得るかもしれません。また、ある場合は、その言葉によってその魂は、自分自身の不徳を消滅し、そして来世高い世界へ生まれ変わることも可能です。

これらを検討するならば、一時的に経済的に豊かになる金や、あるいは貴石や宝石類よりも、確かに偉大な聖者の言葉というものは、価値のあるものではないでしょうか。

そしてわたしは、貴金属や、あるいはお金に対して全く興味はありませんが、やはり偉大なる聖者の教え、あるいは言葉に対しては最も価値を見いだす一人であるのだとい

人に贈るに言を以てするは、金石珠玉よりも重し

うことを付け加えておきましょう。

❖人に善言を与うるは、布帛よりも煖かし

［荀子、栄辱］　憍泄者、人之殃也。恭倹者、俑五兵也。雖有戈矛之刺、不如恭倹之利也。故与人善言、煖於布帛。傷人之言、深於矛戟。

【書き下し文】

憍泄なるは、人の殃いなり。恭倹なるは、五兵を俑くるなり。戈矛の刺有りと雖も、恭倹の利に如かざるなり。故に人に善言を与うるは、布帛よりも煖かし。人を傷つくるの言は、矛戟よりも深し。

【訳】

おごりたかぶることは、人にとって災いである。人を敬い慎み深いことは、五種の武

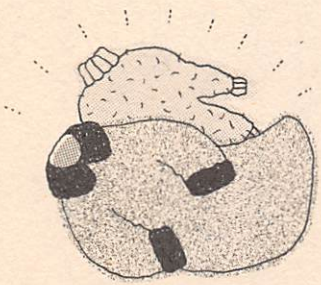
器をも退ける。戈矛には鋭い矛先があるが、人を敬い慎み深いことの鋭さには及ばない。

したがって、人に善い言葉を与えることは、衣服を与えるよりも暖かいのであり、人を傷つける言葉は、矛戟による傷よりも深いのである。

【注】

・「人に善言を与うるは」――これを「人と与に言を善くするは」と読んで、「人と和やかに言葉を交わし合うことは」と解釈することもできる。

・五兵――五種の武器とは、刀・剣・矛・戟・矢のこと。



今日の故事成語は「人に善言を与うるは、布帛よりも煖かし」です。

これは、他の人に対してよい言葉を語るということは、衣服を与えるよりも素晴らしいことであると説く荀子の仏教的言葉の一つということができるでしょう。

もともと真理の実践には八つの段階があります。これはまず、正見解、そして正思惟、正語、正行為、正生活、正奮闘努力、正記憶修習、正サマディの八つです。そして順番としては、まず生き方における苦について徹底的に考える。それを土台として現象を見つめること。第二番目は、それに基づいてこの現象のすべて、あるいは心のすべてについて思索をすること。そして第三番目は、それに基づいて利益のある言葉を語ること――この言葉については、第三番目に最も重要であると説かれています。そして、この正語の実践こそ、まさに善言なのです。

では、少し詳しくこの正語について検討すると、どうなるでしょうか。それは、まず嘘をつかない。悪口を言わない。軽薄な言葉をしゃべらない。仲たがいさせる言葉をしゃべらない。そして、それだけではなく、慈愛のこもった優しい言葉を語るというのが条件となります。

さあ皆さん、皆さんも大いに徳を積むチャンスがやってきました。今日これから、この四つの妄語・綺語・悪口・両舌を捨断し、そして周りに慈愛のこもった優しい言葉を話しかけるようにしましょう。

❖諫めを拒み非を飾る

［荀子、成相］　拒諫飾非、愚而上同、国必禍。

【書き下し文】

諫めを拒み非を飾り、愚にして同を上べば、国必ず禍いあり。

【訳】

諫めを拒み、自分の非を弁護し、愚かな上に自分に雷同する者だけを重用していては、国はきっと災難に遭うだろう。

よし
よし
天下太平
じゃ！
何も案ずる
ことはありま
せん!!

今日の故事成語は「諫めを拒み非を飾る」です。

この言葉もまさに仏教的な言葉であるということができます。つまり、他人の正しい忠告を否定し、そして自分の過ちを飾りたてる。しかし、これはよく見受けられることです。そして、これらの魂は、悪業に悪業を重ね、そして善業が減少し、しまいには悲しい輪廻転生を行なうことになります。

したがって、わたしたちが本当に幸福になるためには、勇気が必要なのです。では、その勇気とは何でしょうか。

それは、他人から正しく忠告されたときは、それを素直に喜んで聞き、そして過ちであると気づいたならば、それを率先して改める姿勢です。

これは仏教における二正勤二正断。つまり、今なしている善法を増大させる。今はまだ徳がなくてなすことができないが、将来において徳が充実したらできる善法を夢みる。今なしている悪業をやめる。今まだ悪業が強すぎてやめることができないが、未来において悪業が減少することによってやめることができるであろう悪業について、それをやめようと夢みる。

そして、これを実践することは、すなわちこの荀子の言葉と同一であるということに、皆さんはきっと気づくはずです。

❖造父は其の馬を窮めず

「荀子、哀公」　定公問於顔淵曰、「東野子之善馭乎。」顔淵対曰、「善則善矣。雖然、其馬将失。」定公不悦、入謂左右曰、「君子固譏人乎。」三日而校来謁曰、「東野畢之馬失、両驂列、両服入廐。」定公越席而起曰、「趨駕召顔淵。」顔淵至。定公曰、「前日寡人問吾子、吾子曰、『東野畢之馭、善則善矣。雖然、其馬将失。』不識吾子何以知之。」顔淵対曰、「臣以政知之。昔舜巧於使民、而造父巧於使馬。舜不窮其民、造父不窮其馬、是舜無失民、造父無失馬也。今東野畢之馭、上車執轡、銜体正矣。歩驟馳騁、朝礼畢矣。歴険致遠、馬力尽矣。然猶求馬不已。是以知之也。」定公曰、「善。可得少進乎。」顔淵対曰、「臣聞之、鳥窮則啄、獣窮則攫、人窮則詐。自古

及今、未有窮其下而能無危者也。」

【書き下し文】

定公、顔淵に問いて曰く、「東野子は之れ善駁なるか」と。顔淵対えて曰く、「善は則ち善なり。然りと雖も、其の馬将に失せんとす」と。定公悦ばず、入りて左右に謂いて曰く、「君子も固より人を讒するか」と。三日にして校来り謁して曰く、「東野畢の馬失し、両驂は列し、両服のみ廐に入る」と。定公席を越えて起ちて曰く、「趨やかに駕して顔淵を召せ」と。顔淵至る。定公曰く、「前日寡人吾子に問うに、吾子曰く、『東野畢の馭は、善は則ち善なり。然りと雖も、其の馬将に失せんとす』と。識らず吾子は何を以て之を知るや」と。顔淵対えて曰く、「臣は政を以て之を知る。昔舜は民を使うに巧みにして、造父は馬を使うに巧みなり。舜は其の民を窮せしめず、造父は其の馬を窮せしめず、是をもって舜には失民無く、造父には失馬無きなり。今東野畢の馭は、車に上り轡を執りて、銜体正し。歩驟馳騁して、朝礼畢くせり。険を歴、遠を致めて、馬力尽く。然も猶お馬に求めて已まず。是を以て之を知るなり」と。定公曰く、「善し。少しく進む

を得べきか」と。顔淵対えて曰く、「臣之を聞く、鳥窮すれば則ち啄み、獣窮すれば則ち攫み、人窮すれば則ち詐ると。古より今に及ぶまで、未だ其の下を窮せしめて能く危きこと無き者有らざるなり」と。

【訳】

定公が、顔淵に尋ねていうには、

「東野子は名御者だろうか」と。

顔淵がお答えしていうには、

「確かに上手なことは上手です。しかしながら、その馬は今にも逃げようとしています」と。

定公は不機嫌になり、内に入ると側近に告げていうには、

「君子でもやはり人の悪口を言うんだなあ」と。

それから三日後、馬の飼育係の役人が来て、お目にかかっていうには、

「東野畢の馬が逃げました。四頭立ての外側の二頭が綱を引きちぎって走り去り、内側

の二頭だけが馬屋に入りました」と。

定公が飛び上がるほど驚いていうには、

「急いで馬車を用意して、顔淵を呼び寄せなさい」と。

やがて顔淵が到着した。定公がいうには、

「先日わたしがあなたに尋ねると、

『東野畢の御者は、確かに上手なことは上手です。しかしながら、その馬は今にも逃げようとしています。』

と、あなたは答えた。いったいどうして、あなたはそのことを知ったのか」と。

顔淵がお答えしていうには、

「わたしは政治上のことからそのことを知りました。昔、舜(しゅん)は人民を使うのが上手であり、造父(ぞうほ)は馬を使うのが上手でした。舜はその人民を限界まで追いつめず、造父はその馬を限界まで追いつめませんでした。だから、舜の時代には逃げ出す人民がなく、造父には逃げ出す馬がなかったのです。

今、東野畢の御し方を見ますと、車に上り手綱を執るという車馬全体の様子は正しく、

歩き走りの調教も行き届いております。しかし、険路を通り過ぎ、遠路を極めれば、馬の力も尽き果ててしまいますが、それでもなお馬に進むことを求めてやみません。こういう理由で、そのことを知ったのです」と。

定公がいうには、

「なるほど。もう少しその話を進めてもらえないか」と。

顔淵がお答えしていうには、

「わたしはこう聞いております。

『鳥は限界まで追いつめられるとつついてくるし、獣は限界まで追いつめられるとつかみかかってくるし、人は限界まで追いつめられると嘘をつく』と。

昔から今に至るまで、下の者を限界まで追いつめて危険がなかったという上の者は、まだ一度もあったためしがありません」と。

【注】

・定公――春秋時代、魯（ろ）の君主。哀公（あいこう）の父。

・顔淵――春秋時代、魯の人。孔子の一番弟子。名は回、字は子淵。
・東野子――姓は東野、名は畢。御者の名。
・舜――中国古代の聖天子。五帝の一人。堯帝と並び称される。
・造父――周の穆王の御者。天下一の名御者といわれる。

今日の故事成語は「造父は其の馬を窮めず」です。

これは、本当の名御者は、その馬を限界まで追いつめない。つまり、その馬の能力以上のことを無理にさせない。転じて、庶民を統治する場合、その民を限界の状態にしてはならないという教えです。確かにこれはこのとおりです。

しかし、別のものの見方も存在します。それは、北伝仏教に存在するマハー・ムドラーの修行において、典型的にその逆の教えが表わされます。

つまり、人間は窮地に追い込まれないと、その本質を現わさない。したがって窮地に追い込み、その本質を現わさせ、その本質をチェンジさせるならば、その人は悟り、解脱をするんだという教えです。したがって、この弟子を調教するグルは、造父以上の名御者でなければ不可能です。

ところで、覚者の段階に十の段階がありますが、その中に「丈夫調御者」という段階があります。これは衆生を真理の法則により、限界まで追いつめ、そして高い世界へ引き上げることのできる魂という意味です。もちろん、このわたしは丈夫調御者を目標としているわけですが。

造父は其の馬を窮めず
マハリシ・ムドラーのグルは弟子を窮地に追い込み解脱させる
すべての苦悩は幻影なんだ

❖禽犢（きんとく）

［荀子、勧学］　古之学者為己、今之学者為人。君子之学也、以美其身、小人之学也、以為禽犢。故不問而告、謂之傲。問一而告二、謂之囋。傲囋非也。君子如嚮矣。

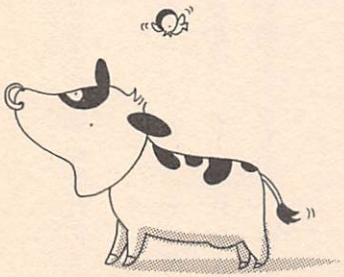
【書き下し文】

古（いにしえ）の学者は己（おのれ）の為（ため）にし、今の学者は人の為にす。君子（くんし）の学は、以（もっ）て其（そ）の身（み）を美（び）にし、小人（しょうじん）の学は、以て禽犢（きんとく）と為（な）る。故（ゆえ）に問わずして告ぐ、之（これ）を傲（ごう）と謂（い）う。一（いつ）を問いて二を告ぐ、之を囋（さつ）と謂う。傲囋は非（ひ）なり。君子は嚮（ひびき）の如（ごと）し。

【訳】

昔の学問をしている者は自分自身を磨き上げるために学問をしたが、今の学問をしている者は人に知られるために学問をしている。君子（くんし）の学問は、自らの身体を立派にするが、小人（しょうじん）の学問は、人に取り入るための鳥や子牛となるだけである。

つまり、尋ねられないのに告げることを傲（ごう）（落ち着きがなく騒がしい）という。一を尋ねられて二を告げることを噴（さつ）（くどくて騒がしい）という。傲も噴も正しくない。君子は、声に応じる響きのように発言するのである。



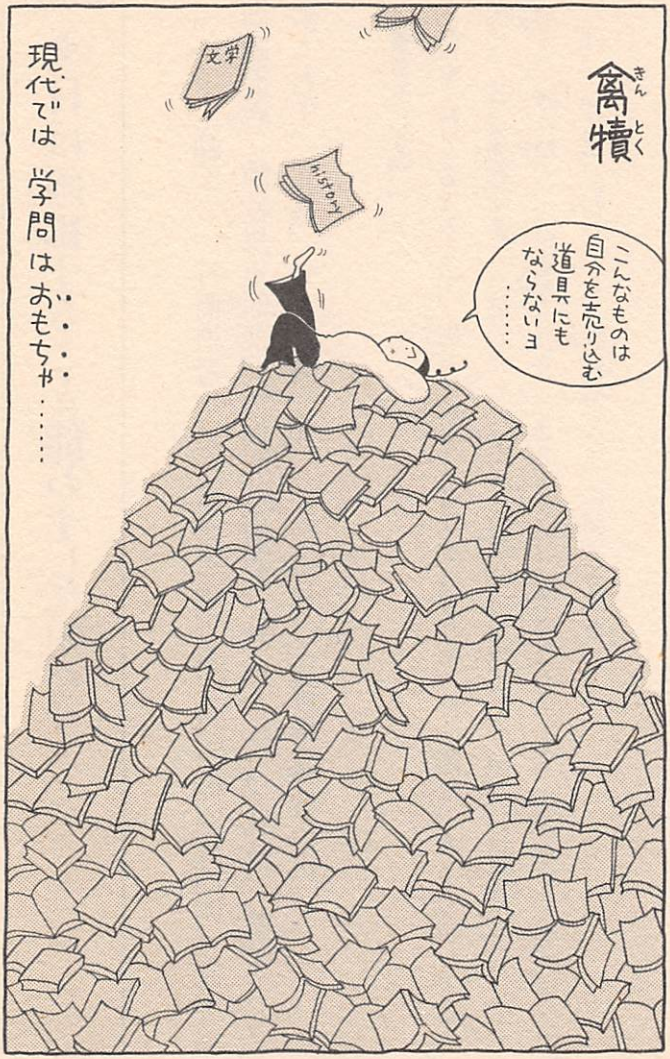
今日の故事成語は「禽犢（きんとく）」です。

「禽」とは鳥のことであり、「犢」とは子牛のことです。これは荀子（じゅんし）が、その時代の人たちの学問を皮肉った故事成語ということができます。

もともと学問は、瞑想のできなかった者が町の近くで経典を編纂（へんさん）し、そして自分自身を磨き上げることを始めたところからスタートしています。さすが荀子、その流れをよく理解していたと見えます。つまり荀子の考えは、学問とは自己を磨くべきものと、はっきりと学問の定義を定めていました。

ところが、荀子の時代の人たちは、禽犢――、つまり鳥や子牛を捧げ物とし、自分自身を売り込むのと同じように、学問は自己を売り込むための道具であると考え、学問をしていると。そして、これはまさにけしからんというのが、この禽犢の意味合いです。

ところで現代では、学問は禽犢からおもちゃに変わったのではないでしょうか。


禽犢
こんなものは自分を古ぶり込む道具にもならないヨ……
文学
現代では学問はおもちゃ……

❖目は両視すること能わずして明なり

［荀子、勧学］　行衢道者不至、事両君者不容。目不能両視而明、耳不能両聴而聡。螣蛇無足而飛、梧鼠五技而窮。詩曰、「尸鳩在桑、其子七兮。淑人君子、其儀一兮。其儀一兮、心如結兮。」故君子結於一也。

【書き下し文】

衢道を行く者は至らず、両君に事うる者は容れられず。目は両視すること能わずして明に、耳は両聴すること能わずして聡なり。螣蛇は足無くして飛び、梧鼠は五技にして窮す。詩に曰く、「尸鳩桑に在り、其の子七つ。淑人君子は、其の儀一なり。其の儀一ならば、心結ぶが如し」と。故に君子は一に結ばるるなり。

【訳】

分かれ道を行く者は目的地に到達せず、二人の君主に仕える者はどちらからも受け入れられない。目は別々のものを同時に見ることはできないが、よく見えるし、耳は別々のものを同時に聴くことはできないが、よく聞こえる。螣蛇は足がなくても飛ぶことができるが、ムササビは五つの特技を持ちながらも困窮してしまう。

詩にいうには、

「桑に巣くうキジバトの、その子は七羽。（七羽の育て方が一様なこの鳥のように、）善人たる君子は、その威儀が一定している。その威儀が一定であれば、心は結ばれたようになる」と。

つまり、君子は心を一つに集中しているのである。

【注】

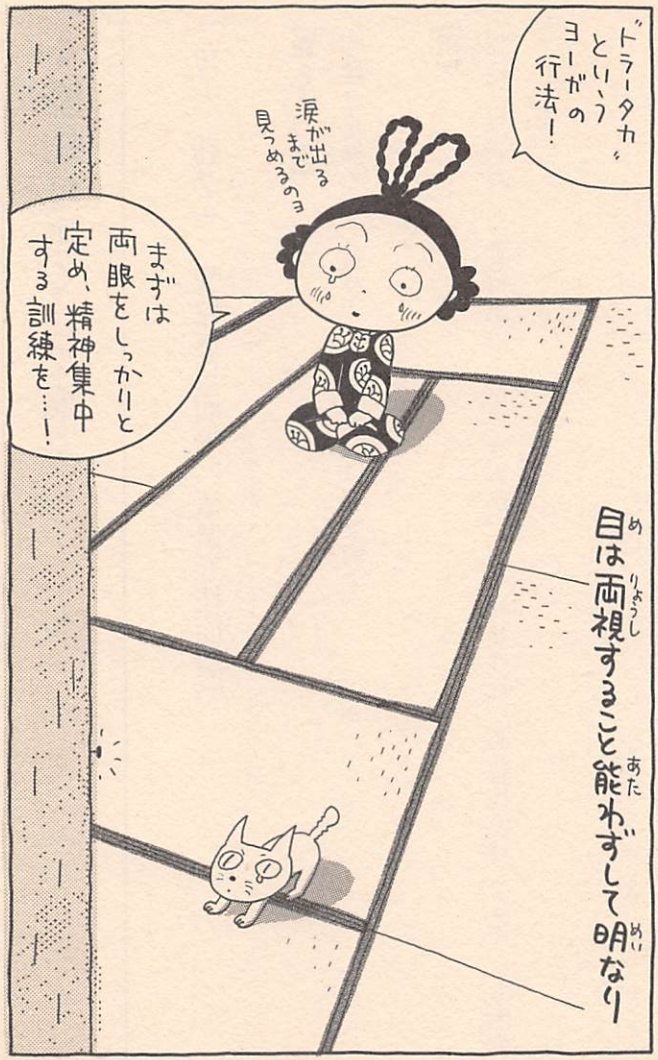
・詩――出典は、『詩経』国風・鳲鳩。

今日の故事成語は「目は両視すること能わずして明なり」です。

つまり、わたしたちの目というものは、両眼が一つのものに集中して、初めてその対象を正しくとらえることができる。つまり、片方片方の眼で別の物を見ることはできないんだ。したがって、両眼で精神集中することこそ、対象をしっかりとらえることこそ大切であると説く荀子の、まさにヨーガ的考えということができるでしょう。

この訓練がなされると、その一点凝視から意識が拡大し、そして多くのものを瞬時にとらえることができる経験をすることができるようになります。その段階に入って、瞑想は第二段階へ至るということができるでしょう。つまり荀子のものの考え方は、真理の段階でいうならば、まず初歩的な段階を幅広く確定し、そしてそれを自分のものにした学者ということができるでしょう。

あなたもまずは両眼をしっかりと定め、そして一つのものに固定できる精神状態を培っていただきたいものです。


ドラータカ
という
ヨーガの
行法！
涙が出る
まで
見つめるのョ
まずは
両眼をしっかりと
定め、精神集中
する訓練を…！
目は両視すること能わずして明なり

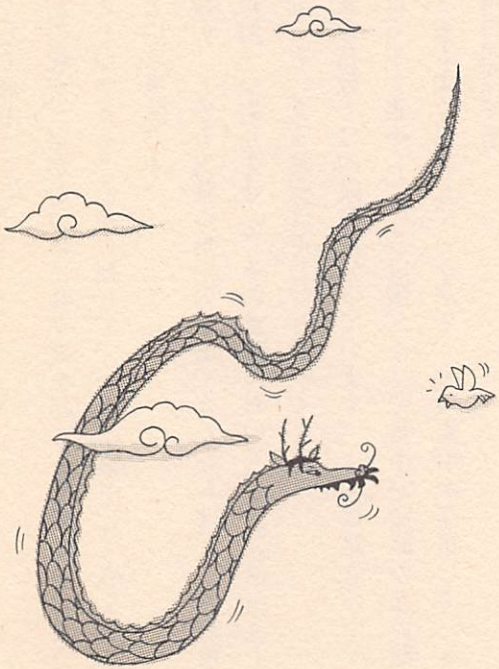
❖螣蛇足無くして飛ぶ

［荀子、勧学］　螣蛇無足而飛、梧鼠五技而窮。

【書き下し文】
螣蛇は足無くして飛び、梧鼠は五技にして窮す。

【訳】
螣蛇は足がなくても飛ぶことができるが、ムササビは五つの特技を持ちながらも困窮してしまう。

膸蛇足無くして飛ぶ



今日の故事成語は「螣蛇足無くして飛ぶ」です。

これは、龍に似た螣蛇という幻の蛇が、足がないのに霧や雲を起こして飛び遊ぶ。つまり、加速をつけなくても飛ぶことができることから転じて、一点に集中して事をなそうとするならば、必ず成功するという意味です。

確かにわたしたちの心に大変鋭い、しかも力強い集中力が出てきたならば、この現象の世界においてかなわないことは何一つありません。その意味において、この荀子のヨーガ的ともいえる、あるいは仏教的ともいえる解釈は正しいともいえます。

ところで、この精神集中の段階を仏教では四段階に分けています。まずは雑念の中で集中する段階。次は雑念をとっぱらって集中している段階。そして集中が意識の深い部分に広がっている段階。最後は、最も強く集中していながら、その集中が存在しているでも存在していないでもない段階の四つです。

そして、もちろんこの一、二、三、四の順に、現象を動かす力は強くなっていくということができます。皆さんも螣蛇のような人生を送れたらいいですね。

螣蛇足無くして飛ぶ
彼が
真理の流れに
入りますように！
念
念
念
念
鋭く力強い集中力をもってすれば
かなわぬことはない！
ん

❖刑錯きて用いず

［荀子、議兵］　古者帝堯之治天下也、蓋殺一人、刑二人、而天下治。伝曰、「威厲而不試、刑錯而不用。」

【書き下し文】

古者帝堯の天下を治むるや、蓋し一人を殺し、二人を刑して、天下治まる。伝に曰く、「威は厲にして試みず、刑は錯きて用いず」と。

【訳】

その昔、堯帝が天下を治めたときには、思うに、一人を殺し二人を罰しただけで、天下は治まったという。

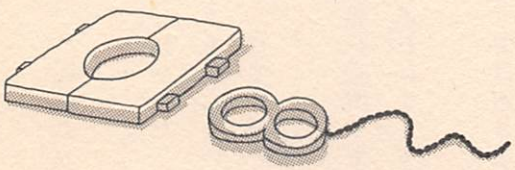
古伝にいうには、

「威力は激しいが試されることはなく、刑罰は設けられているが用いられることはない」

と。

【注】

・堯――中国古代の聖天子。五帝の一人。舜帝（しゅんてい）と並び称される。



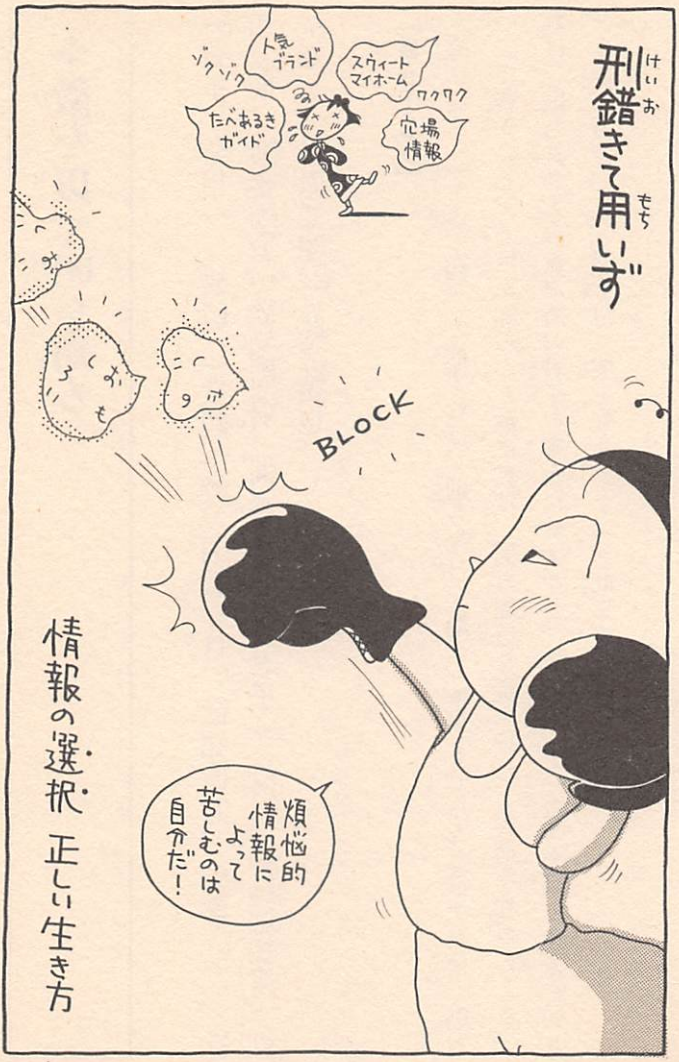
今日の故事成語は「刑錯(けいお)きて用(もち)いず」です。

これは国家が安泰の様子、そして国民一人一人に対する教育が行き届き、それによって法律を犯す人がいないという状態を表わします。

もともとわたしたちは情報によって動かされる生き物です。したがって、わたしたちがもし真理のデータのみを吸収し、そして自己のけがれを増大させるデータをとらないとするならば、荀子(じゅんし)の説く「刑錯きて用いず」、つまり刑罰が存在していたとしても、それを使う必要のないような国家ができ上がるはずです。

しかし、今の国家を見ますと、やはりわたしたちを煩悩的に、あるいは悪い感情を生起させるような情報が氾濫しすぎているのではないでしょうか。そして、それによって苦しむのは、他ならぬわたしたちなのです。

しっかりと情報の選択をし、そして正しい生き方ができるように努めようではありませんか。


刑錯きて用いず
人気ブランド
スウィートマイホーム
たべあるきガイド
穴場情報
ゾクゾク
ワクワク
BLOCK
煩悩的情報によって苦しむのは自分だ！
情報の選択 正しい生き方

❖微を以て明を知る

［荀子、非相］　故曰、「欲観千歳、則数今日、欲知億万、則審一二、欲知上世、則審周道、欲知周道、則審其人所貴君子。」故曰、「以近知遠、以一知万、以微知明、」此之謂也。

【書き下し文】

故に曰く、「千歳を観んと欲すれば、則ち今日を数え、億万を知らんと欲すれば、則ち一二を審かにし、上世を知らんと欲すれば、則ち周道を審かにし、周道を知らんと欲すれば、則ち其の人の貴ぶ所の君子を審かにせよ」と。故に曰く、「近きを以て遠きを知り、一を以て万を知り、微を以て明を知る」とは、此を之れ謂うなり。

【訳】

だから、「千年前のことを示そうとすれば、今日のことを調べる必要があり、億万のことを知ろうとすれば、一、二のことを明らかにすべきであり、上古のことを知ろうとすれば、手近な周の政道を明らかにすべきであり、周の政道を知ろうとすれば、しかるべき人が尊ぶ君子のことを明らかにすべきである」というのである。

昔の言葉に、「近くによって遠くを知り、一によって万を知り、些細なことによって重大な事実を知る」とあるが、このことを言ったのである。

今日の故事成語は「微を以て明を知る」です。

これは、北伝系仏教の秘儀の修行体系であるマハー・ムドラーの内容を一言で言い表わしたものだということができるでしょう。

つまり、わたしたちの言葉・行動・心の働き、これは瞬間瞬間にいろいろな現象を巻き起こします。そして、その小さな現象に心を集中し識別をすると、必ずその本質が理解できます。これこそがまさに「微を以て明を知る」です。

そしてこれは、未来はどうなっているのか、あるいは過去はどうであったのか、あるいはこの人はどのような人物であるか、あるいは本質的にはこの論理は正しいのか正しくないのかというすべてにおいて、この「微を以て明を知る」に通じれば理解できます。そして、この最終地点をマハー・ムドラーの成就ということができるのです。

さあ、あなたも今日から真理の実践を行ない、そしてこの「微を以て明を知る」に完達しましょう。

彼女の心の背景は……
しくしく
微を以て明を知る
心を集中し識別すると必ずその本質が理解できる

❖錐刀を以て泰山を堕つ

［荀子、議兵］　招近募選、隆埶詐尚功利、是漸之也。礼義教化、是斉之也。故以詐遇詐、猶有巧拙焉。以詐遇斉、辟之猶以錐刀堕泰山也。非天下之愚人、莫敢試。

【書き下し文】

招近募選し、埶詐を隆び功利を尚ぶは、是れ之を漸するなり。礼義教化は、是れ之を斉しくするなり。故に詐を以て詐に遇うは、猶お巧拙有り。詐を以て斉に遇うは、之を辟うるに猶お錐刀を以て泰山を堕つがごときなり。天下の愚人に非ざれば、敢えて試みること莫し。

【訳】

兵士を招き寄せ募集し選択して、権勢や詐術(さじゅつ)を貴び功績や利益を重んじることは、民衆をその方向に進ませることになり、礼義によって教化することは、民衆を統一していくことになります。

つまり、詐術によって詐術の敵に向かうなら、まだ上手下手による勝ち負けがあるでしょうが、詐術によって統一された敵に向かうのは、たとえてみれば、ちょうど先のとがった小さな刀で泰山(たいざん)を崩そうとするようなもので、世にも稀な愚者でなければ、決してやろうとも思わないでしょう。

【注】

・泰山――山東省にある山の名。五岳の一つ。

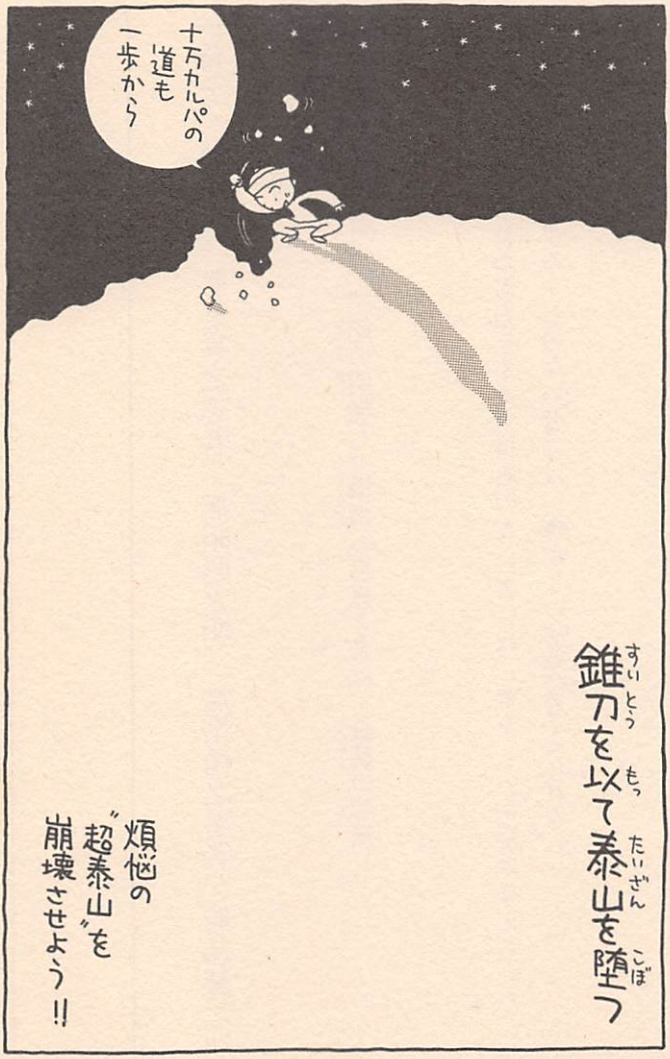
今日の故事成語は「錐刀を以て泰山を堕つ」です。

この「錐刀」とはとがった小さな刀のこと、「泰山」とは大きな山、そして「堕つ」とは「それを完全に崩壊させる」という意味です。そして、これを荀子は、全く意味のないことである、無益徒労であると説いています。

しかしわたしは、この「錐刀を以て泰山を堕つ」のことわざには、大いに意味のあることと説きます。では、それはなぜでしょうか。

わたしたちの煩悩というものは、もともとこの泰山よりもっともっと大きな山にたとえることができます。そして、それに対してわたしたちがもし小刀の先で少しずつほじくることしかできないとしても、それを一生、十生、百生、そして一カルパ、十カルパ、千カルパ、一万カルパ、十万カルパと長きにわたる努力を続けることによってのみ、この大いなる煩悩の山、泰山を超えた〝超泰山〟を崩壊させることができるのです。

したがって、努力しないよりする方がまし。そして、その努力は目に見えなくても、いずれ必ず大きな結果が出るんだということを確信を持って行なうべきでしょう。


十万カルパの
道も
一歩から
錐刀を以て泰山を堕つ
煩悩の
〝超泰山〟を
崩壊させよう!!

❖冥冥の志（めいめいのこころざし）

［荀子、勧学］　無冥冥之志者、無昭昭之明。無惛惛之事者、無赫赫之功。

【書き下し文】

冥冥（めいめい）の志（こころざし）無き者は、昭昭（しょうしょう）の明（めい）無し。惛惛（こんこん）の事無き者は、赫赫（かくかく）の功（こう）無し。

【訳】

こつこつと人知れぬ努力をする気持ちのない者には、華々しい栄誉は与えられない。
黙々と精神を集中することのない者には、輝かしい功績は与えられない。

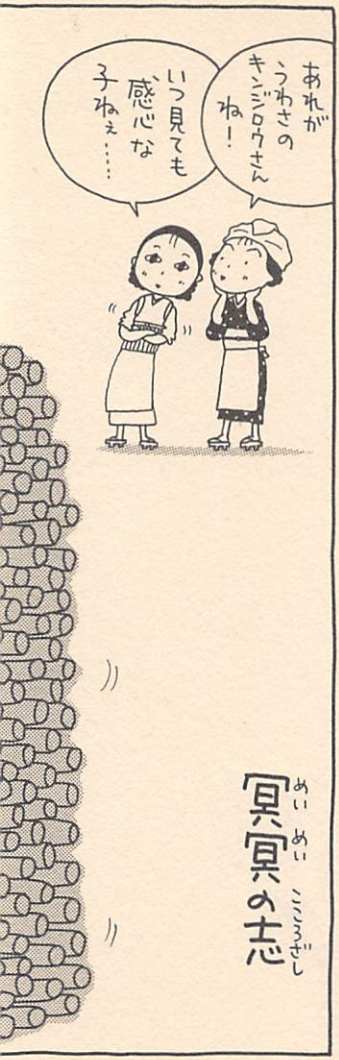
ホーラ
ピッカ
ピカ
キュッ
キュ

今日の故事成語は「冥冥の志」です。これはわたしの最も好きな考え方の一つです。

「冥冥の志」とは、人の知られないところで黙々と努力する、そして大願を抱くということです。ではなぜ、人の知っているところで努力してはいけないのでしょうか。

これは『聖書』にも説かれていますし、仏典でも説かれていますが、それはすでにそのカルマの恩恵を受けている、つまりその人の努力した分だけは周りが評価することにより、徳がたまらないというところから来ています。

そして、かくいうわたしの修行目標の一つ、これはもちろん「冥冥の志」であることはいうまでもありません。あなたも人目につく努力ではなく、「冥冥の志」を実践してみてはいかがでしょうか。



人目につく
努力ではなく
「冥冥の志」を
実践してみては
いかが？
てく
てく
てく
人知れず
もくもくと……

❖学は之を行うに至りて止まる

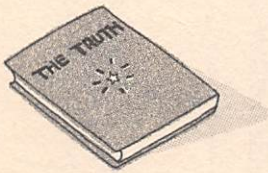
［荀子、儒効］　不聞不若聞之、聞之不若見之、見之不若知之、知之不若行之。学至於行之而止矣。行之明也。明之為聖人。聖人也者、本仁義、当是非、斉言行、不失豪釐。無他道焉。已乎行之矣。

【書き下し文】

聞かざるは之を聞くに若かず、之を聞くは之を見るに若かず、之を見るは之を知るに若かず、之を知るは之を行うに若かず。学は之を行うに至りて止まる。之を行えば明らかなり。明之を聖人と為す。聖人なる者は、仁義に本づき、是非に当たり、言行を斉しくし、豪釐を失わず。他の道無し。之を行うに已まる。

【訳】

聞かないことは聞くことに及ばず、聞くことは見ることに及ばず、見ることは知ることに及ばず、知ることは実践することに及ばない。学問は実践に至ることを究極の目標とするのである。実践すれば物事に通暁する。物事に通暁しているのを聖人という。聖人が仁義に基づき、是非を判断し、言行を一致させ、わずかな間違いもしないのは、決して他の方法によるのではなく、実践を究極の目標としているからである。



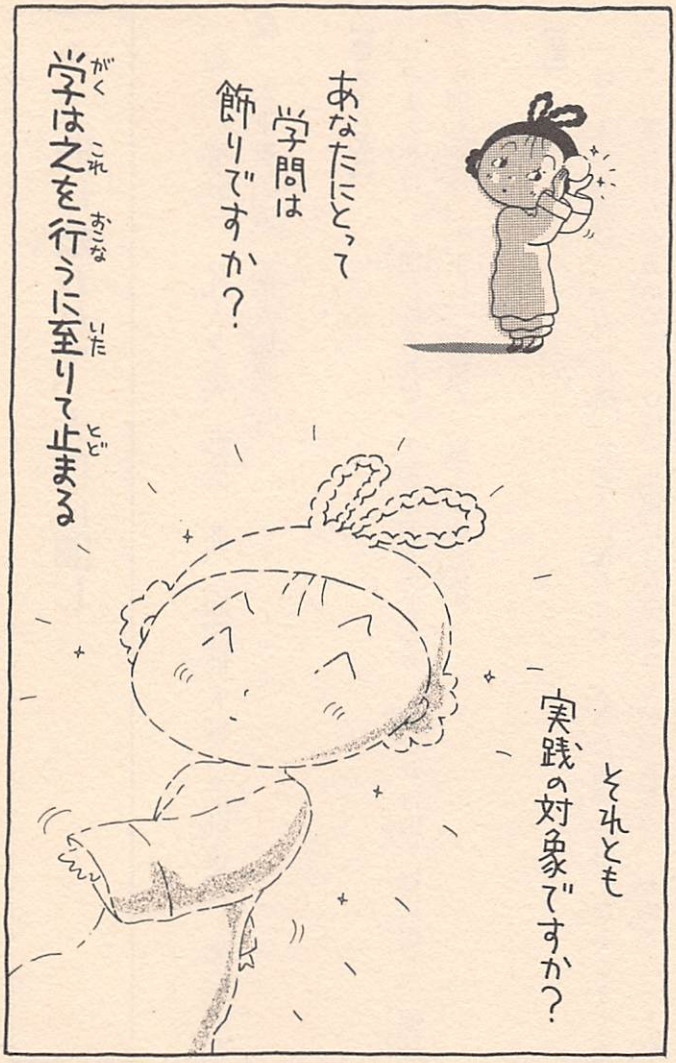
今日の故事成語は「学は之を行うに至りて止まる」です。

これはどういう意味かというと、要するに学問というものは、その教えがわかっただけではなく、それをそのまま実践できて初めてその学問を体得したことになるという意味です。

これは仏教的な「聖なる八段階の道」――日本では「八正道」といわれていますが――その考え方とも一致しています。まず、第一に正学、正しい学問があって、それを身・口・意に対応しながら正しい思索、正しい言葉、そして正しい行動を実践することによって八正道は進みます。そして、その究極の状態が「三昧」なのです。

したがって、学問は知っていてもしょうがない。それが実践できて初めて価値があるんだと説く荀子の考え方は、当を得た素晴らしい考え方だということができるでしょう。

あなたにとっての学問は飾りですか、それとも実践の対象ですか。それによってあなたの未来は大きく変わることでしょう。


あなたにとって
学問は
飾りですか？
学は之を行うに至りて止まる
それとも
実践の対象ですか？

❖一曲に蔽われて、大理に闇し

［荀子、解蔽］　凡人之患、蔽於一曲、而闇於大理。治則復経、両疑則惑矣。天下無二道、聖人無両心。

【書き下し文】

凡そ人の患は、一曲に蔽われて、大理に闇きことなり。治むれば則ち経に復し、両疑すれば則ち惑う。天下に二道無く、聖人に両心無し。

【訳】

一般に人の欠点は、一方に片寄った考えに覆われて、大きな道理に暗くなることである。この覆われた心を治めていけば、正道に立ち戻ることができるが、あれこれと手を

出して専心しなければ、疑い惑うだけである。天下に二つの道はなく、聖人に二つの心はない。

今日の故事成語は「一曲に蔽われて、大理に闇し」です。

これはまさに、荀子の大乗仏教的発想がうかがわれる故事成語だと思われます。「一曲に蔽われて、大理に闇し」――、つまり人が自分自身の極端な悩みに対して没入しているとき、その大道を理解することができない。これは小人にはよくあることです。

そして、これを取り払う修行法、これこそがまさに真理なのです。あなたがもしこれを取り払うための努力を積み重ねたならば、必ずやあなたは一曲から解放され、そして大道に立ち、自分自身の大きな利益のみならず、衆生の利益について理解していくことができるようになるでしょう。

ぜひとも真理の実践を行なっていただきたいものです。

大道に
目覚めなさい
わたしって
世の中で一番不幸……

❖心を養うは、誠より善きは莫し

［荀子、不苟］　君子養心、莫善於誠。致誠則無它事矣、唯仁之為守、唯義之為行。

【書き下し文】

君子心を養うは、誠より善きは莫し。誠を致むるには則ち它事無し、唯だ仁を之れ守ることを為し、唯だ義を之れ行うことを為す。

【訳】

君子が心を養っていくには、誠によることより善いものはない。誠を極めるのに他の方法はない。ただ仁を守るだけであり、ただ義を行なうだけである。

心を養うは、誠より善きは莫し

今日の故事成語は「心を養うは、誠より善きは莫し」です。

この「誠」には、真実あるいは約束事をしっかり守るという意味があります。つまり、心を成熟させるためには、しっかりと約束を守り、そして他に対して真心を尽くすこと。これを行なうことによって、君子の道は最高の方向へ向かうんだと荀子は説いているわけです。

そしてこの約束を守る――、これは真理の実践において、戒律の中の四番目に属しますが、これを実践することにより、確かにある程度の君子の段階に至ることはできるでしょう。

しかし、これはまだ土台の修行であるとわたしは考えています。いずれにしろ、もしあなたが「誠」という字義をしっかり理解し、これを実践なさるならば、大きな利益があることは疑いないでしょう。

約束を守り
真心を
尽くします……
心を養うは、誠より善きは莫し
心の成熟への道ね

❖源清ければ則ち流れ清し

［荀子、君道］　君子者治之原也。官人守数、君子養原。原清則流清、原濁則流濁。故上好礼義、尚賢使能、無貪利之心、則下亦将綦辞譲、致忠信、而謹於臣子矣。

【書き下し文】

君子なる者は治の原なり。官人は数を守り、君子は原を養う。原清ければ則ち流れ清く、原濁れば則ち流れ濁る。故に上礼義を好み、賢を尚び能を使い、利を貪るの心無くんば、則ち下も亦将に辞譲を綦め、忠信を致めて、臣子に謹まんとす。

【訳】

君主は治平の根源である。役人は規則を守るが、君子は根源を養う。根源が清らかであれば下流も清らかだが、根源が濁れば下流も濁る。

したがって、上の者が礼義を好み、賢者を尊び、有能な者を使い、利益を貪る心がなければ、下の者も謙譲の心を極め、誠実を尽くし、臣子の務めを謹んで守るようになるだろう。

今日の故事成語は「源清ければ則ち流れ清し」です。

これは川の本流が綺麗であれば、その末流も川の流れは綺麗であるというたとえです。つまり、君主が清らかであれば、その仕える民もまた清らかであり、国民も清らかであると説く、荀子の儒教的考え方ということができるでしょう。

確かにこれは正しい見解であるということができます。つまり、もし君主が心清らかで、そして偉大な心を有していれば、国民も同じように心清らかで、そして寛大な心を有することができるでしょう。

ところで、世界を見渡した場合、国民一人一人が心清らかで、しかも寛大な心を有している国家が一つとしてあるでしょうか。これは、すでにカーリー・ユガの時代に突入し、末法の様相を呈しているがゆえの現象であるということができます。

君主が早くそれに気づき、そして心清らかで寛大な心を有していただきたいなとわたしは近頃日々感じているのです。

ところで
世界を見渡した場合……
まさに
カーリー・
ユガの
時代だわ
ズズズン
源清ければ則ち流れ清し
10000
10000
10000
10000

❖礼の三本

［荀子、礼論］　礼有三本。天地者生之本也。先祖者類之本也。君師者治之本也。無天地悪生。無先祖悪出。無君師悪治。三者偏亡焉、無安人。故礼上事天、下事地、尊先祖、而隆君師。是礼之三本也。

【書き下し文】

礼に三本有り。天地は生の本なり。先祖は類の本なり。君師は治の本なり。天地無くんば悪くんぞ生ぜん。先祖無くんば悪くんぞ出でん。君師無くんば悪くんぞ治まらん。三者偏亡すれば、人を安んずること無し。故に礼は上天に事え、下地に事え、先祖を尊びて、君師を隆ぶ。是れ礼の三本なり。

【訳】

礼には三つの根本がある。天地は生命の根本であり、先祖は人類の根本であり、君師は平和の根本である。天地がなければ、どうしてこの世に生まれることがあろうか。先祖がなければ、どうしてこの世に現われることがあろうか。君師がなければ、どうしてこの世が治まることがあろうか。この三者のどれか一つでも欠けたなら、人は安らかになることがない。

したがって、礼というものは、上は天に仕え、下は地に仕え、先祖を尊んで、君師を敬うのである。これが礼の三つの根本である。

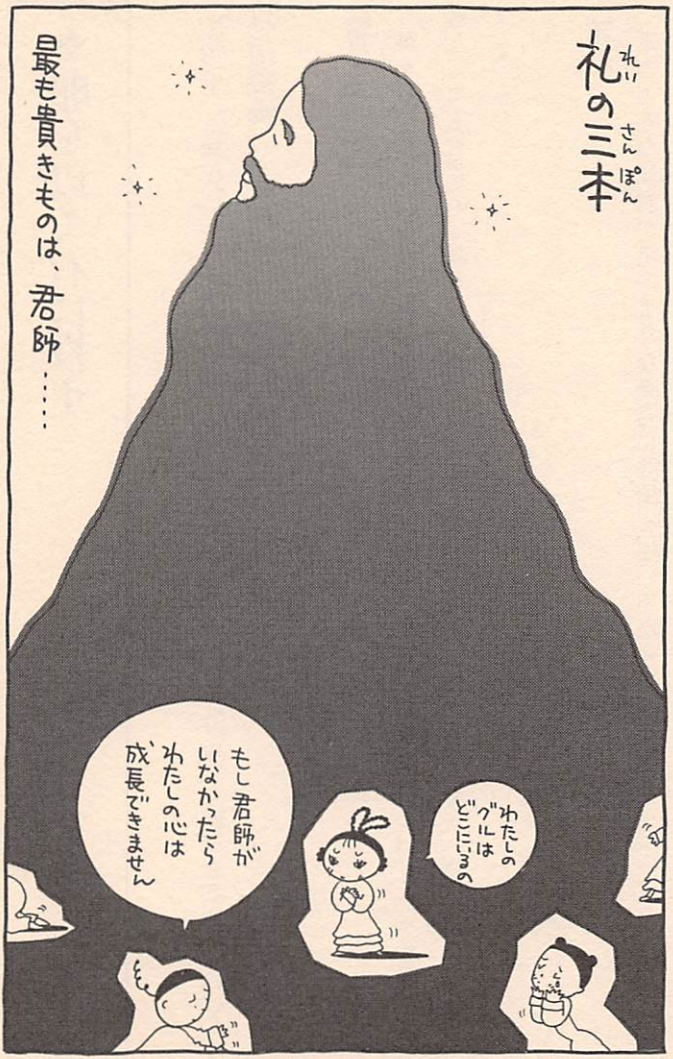
今晩の故事成語は「礼の三本」です。

この「礼の三本」は、天地、先祖、君師を指します。ではなぜこれが「礼の三本」なのでしょうか。

まず、わたしたちは天地によって育まれます。そして、先祖によってこの身体を得ました。そして、君師はわたしたちの心を育んでくれます。したがって、この天地、先祖、君師は、「礼の三本」であると荀子は説くわけです。

確かにわたしたちは、この天地がなければ生活することはできません。しかし、逆に天地によって苦しめられることも事実です。確かにわたしたちは、先祖によってこの身体を得ました。しかし、この身体があるがゆえに病・老い・死というものを経験しなければなりません。そして、もし君師がいなければ、わたしたちの心を育むことはできません。

したがって、最も貴きもの、これは君師であるとわたしは説きます。あなたはいかがですか。


礼の三本
最も貴きものは、君師……
わたしのグルはどこにいるの
もし君師がいなかったらわたしの心は成長できません

❖卵を以て石に投ず

［荀子、議兵］　以桀詐桀、猶巧拙有幸焉、以桀詐堯、譬之若以卵投石、以指撓沸、若赴水火、入焉焦没耳。

【書き下し文】

桀を以て桀を詐るは、猶お巧拙して幸有らんも、桀を以て堯を詐るは、之を譬うるに卵を以て石に投じ、指を以て沸けるを撓すが若く、水火に赴くが若く、焉に入れば焦没せんのみ。

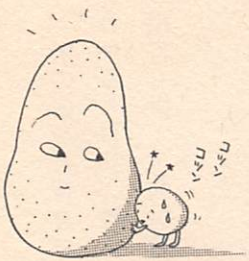
【訳】

桀のような暴君が桀のような暴君に詐術を用いるなら、まだ上手下手による勝利があ

るでしょうが、桀のような暴君が堯のような聖王に詐術を用いるのは、たとえてみれば、卵を石に投げつけたり、指で熱湯をかき回すようなものであり、水や火の中に飛び込むようなものであります。この中に入るなら、焼け死ぬか溺れ死ぬかするだけでしょう。

【注】

・桀――夏の最後の王。暴君の代表とされる。
・堯――57ページ参照。



今日の故事成語は「卵を以て石に投ず」です。

もし石に対して卵をぶつけたとしたら、だれが考えても卵が割れ、中の白身と黄身がべたっと石に張りつく様子が目に浮かぶことでしょう。これからもわかるとおり、鍛えられていない弱い者が強い者に立ち向かったとして、強い者は何の損害も得ず、弱い者は大きな不利益を被るだけであると荀子は説きます。

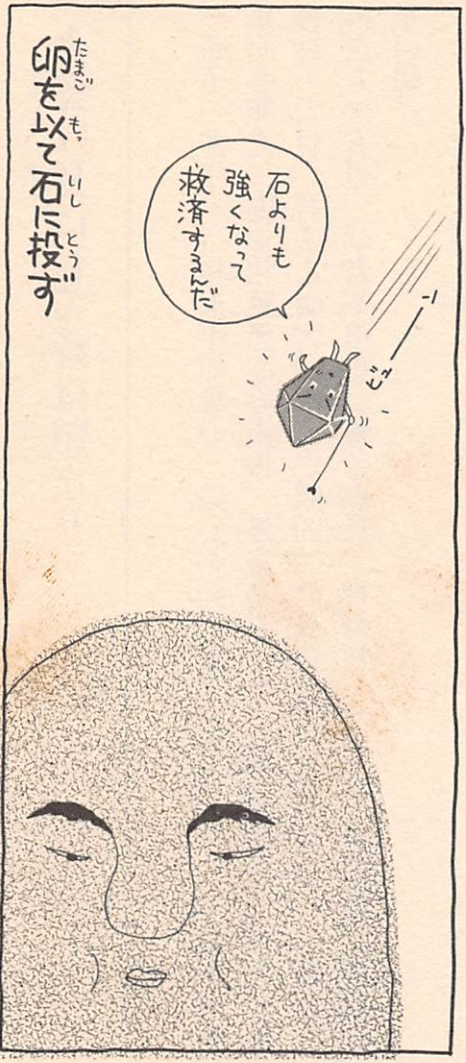
確かにそのとおりです。例えば、読売巨人軍が九連覇を達成しました。これはひとえに、川上哲治監督が選手を徹底的に鍛え、そして相手の球団より強い、つまり石より強いものに変えたから九連覇を達成することができたわけです。

わたしも救済活動において同じ考え方を持っています。この現世の普通の人や、あるいは道に外れた教えを実践している人たちの心は、まさに石そのもの。それに対して瞑想修行も熟達していない、教えも理解していない者が救済しようとしても、救済できるはずがない。よって激しい、数カ月あるいは数年の修行を経た者が、その人たちを教え導く係として適用されるわけです。

しかし、数カ月、あるいは数年修行していても、石とぶつかり、そして卵のように破

裂する弟子もいるのです。それほどこの現世のけがれは強いものなのですよ。

あなたももし自分の願望を達成したいとするならば、自分自身を石よりも強いものに変える――、つまりダイヤモンドの鉱石ぐらいの硬さを有するように日々努力していただきたいものです。



❖堯は長にして舜は短なり

［荀子、非相］　相形不如論心、論心不如択術。形不勝心、心不勝術。術正而心順之、則形相雖悪而心術善、無害為君子也。形相雖善而心術悪、無害為小人也。君子之謂吉、小人之謂凶。故長短・小大・善悪形相、非吉凶也、古之人無有也、学者不道也。蓋帝堯長、帝舜短。文王長、周公短。仲尼長、子弓短。

【書き下し文】

形を相するは心を論ずるに如かず、心を論ずるは術を択ぶに如かず。形は心に勝たず、心は術に勝たず。術正しくして心之に順わば、則ち形相悪しと雖も心術善くして、君子たるを害すること無きなり。形相善しと雖も心術悪しければ、小人たるを害すること無

きなり。君子を之れ吉と謂い、小人を之れ凶と謂う。故に長短・小大・善悪の形相は、吉凶に非ざるなり、古の人有る無きなり、学者道わざるなり。蓋し帝堯は長にして、帝舜は短なり。文王は長にして、周公は短なり。仲尼は長にして、子弓は短なり。

【訳】

人の外形によって吉凶を占うことは、人の心が正しいかどうかを論じることに及ばないし、人の心が正しいかどうかを論じることは、その人の行動のあり方を検討することに及ばない。外形は心に勝てず、心は行動のあり方に勝てないのである。

行動のあり方が正しく、心がそれに従って正しければ、形相が悪くても心と行動のあり方が善いのだから、君子と見なしても差しつかえない。反対に、形相が善くても心と行動のあり方が悪ければ、小人と見なしても差しつかえない。君子である姿を吉といい、小人である姿を凶という。したがって、長短・大小・善悪の形相は、吉凶とは関係ないのである。昔の人はそのようなことを問題にしなかったし、学問をしている者は口にしなかったのである。

思うに、堯帝は背が高く、舜帝は背が低かった。文王は背が高く、周公は背が低かった。仲尼は背が高く、子弓は背が低かったのである。

【注】

・堯帝――57ページ参照。
・舜帝――41ページ参照。
・文王――殷の時代、周の王。武王の父。
・周公――殷末・周初の政治家。文王の子で武王の弟。武王を助けて殷を滅ぼし、武王の子の成王を助けて、周王朝の基礎を築いた。
・仲尼――儒家の祖、孔子の字。
・子弓――荀子が孔子と並んで最も尊敬している人物であるが、だれなのかは明確でない。

外見や
顔立ちは
単に過去世の
カルマの結果
です

今日の故事成語は「堯は長にして舜は短なり」です。

この堯と舜は、古代の五帝のうちの二人です。この故事成語の意味合いは、身長の高い低い、あるいは顔の美醜、あるいは太っている痩せているといったような外見では、その人の本質を理解することはできない。つまり、その人の本質は、その人の心の働き・言葉・行動によって測るべきであると説く荀子の考え方です。

実は、この考え方と呼応するかのような仏典があります。これはネパールに存在する仏典ですが、サキャ神賢は前生、大変醜い王子として生まれたと。そして、その他の王子は大変美しかったと。しかし、その醜い王子の智慧・力・徳、これは大変優れていて、最終的にはその美しい兄弟たちをすべてかしずかせたという教えです。

わたしもこの意見には賛成です。確かに形状・容姿、つまり外見や顔立ちといったものは、過去世の功徳の現われということができましょう。しかし、それはもうすでに結果として成立してしまっていること。そして、その結果にとらわれたのでは未来が存在しない。したがって、今その人がどのような心の持ち主であり、どのような言葉を吐き、どのような行動をなすかということが最も大切なのではないでしょうか。

あなたは形状・容姿が美しい人を選びますか、それとも心が優しくて言葉や行動が抜きんでて研ぎ澄まされている人を選びますか。それはあなたの未来を決定することになるでしょう。

❖駑馬も十駕

［荀子、脩身］　夫驥一日而千里、駑馬十駕、則亦及之矣。

【書き下し文】

夫の驥は一日にして千里なるも、駑馬も十駕すれば、則ち亦之に及ぶ。

【訳】

かの駿馬は一日に千里を走るというが、歩みののろい馬でも十日も歩けば、これに追いつくことができる。

前にすすんでいればいずれ追いつくさ

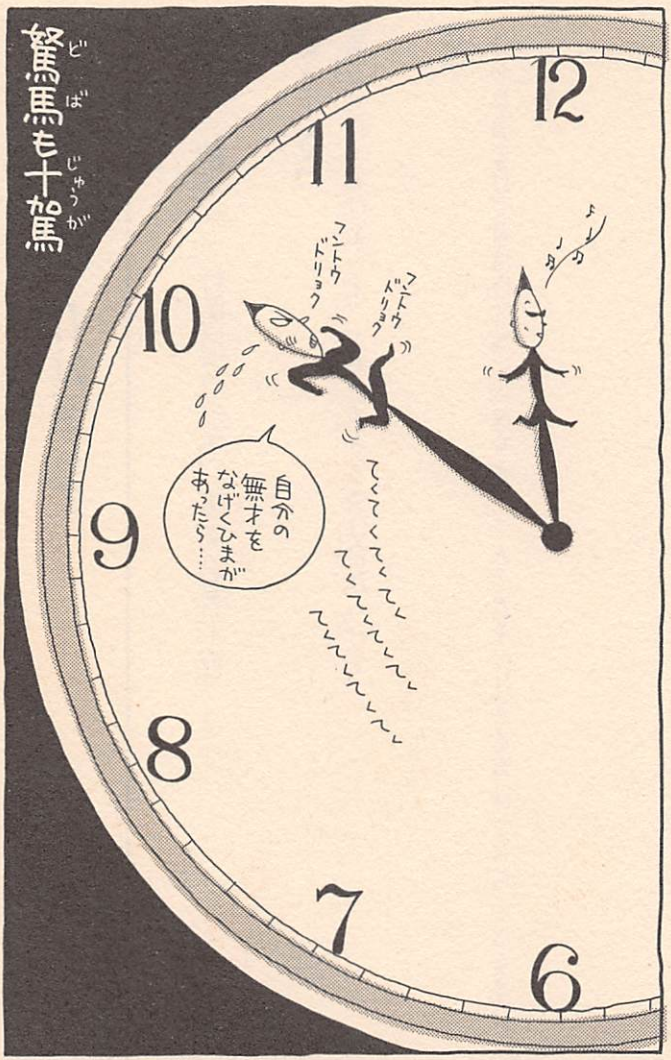
今日の故事成語は「駑馬も十駕」です。

この「駑馬も十駕」とは、歩みののろい馬でも、努力をし続けることによっていずれは駿馬と同じ距離を行くことができるという考え方です。これは「錐刀を以て泰山を堕つ」と全く逆の意味で荀子が説いている成語です。

この考え方は先程の「錐刀を以て泰山を堕つ」と対立する考え方ですから、短期的には「錐刀を以て泰山を堕つ」、長期的には「駑馬も十駕」というのが荀子の考え方であると理解することができます。

ところで、わたしは、この「駑馬も十駕」という考え方に徹して生きている一人です。もともとわたしは無才能です。そのわたしでも努力をコツコツと続ける――、例えば普通の人が八時間努力するところを二十四時間努力すれば三分の一の才能しかなくても同じ結果が出せるという、この「駑馬も十駕」こそ、わたしの最も好むところなのです。

そして、あなたも今自分自身の才能に悲嘆するより、この「駑馬も十駕」に徹してみてはいかがでしょうか。これは、真理で説くところの「奮闘努力」に値する言葉であることを付け加えておきましょう。


駑馬も十駕
ビばじゅうが
12
11
10
9
8
7
6
フントウドリョク
フントウドリョク
てくてくてくてく
てくてくてくてく
てくてくてくてく
自分の無才をなげくひまがあったら…

❖衢道を行く者は至らず

［荀子、勧学］　行衢道者不至、事両君者不容。

【書き下し文】

衢道を行く者は至らず、両君に事うる者は容れられず。

【訳】

分かれ道を行く者は目的地に到達せず、二人の君主に仕える者はどちらからも受け入れられない。

うーん
また分かれ道だ
迷うなァ……

今日の故事成語は「衢道を行く者は至らず」です。

これは、分かれ道を絶えず選択しながら行っている者は最終地点に到達することができないと説く、荀子独特の考え方です。

確かにそのとおりだと思われます。なぜならば、一本の道にこそ最終地点が存在しているのです。つまり、心を散乱させず、絶えず精神を集中し続けて、しっかりと目的を見つめながら目的地へ向かう者こそ最終地点に到達するんだと荀子は説いているのです。また、ここから派生して、二君に仕える者は結局二君からも信用されないと荀子は発展させています。

ところで、チベット仏教において、このような考え方があります。グルがいたと。そして、そのグルが亡くなったと。その亡くなったグルに対して大変愛着している弟子がいたと。この弟子が次のグルを探し、そのグルのもとに至ったと。ところが以前のグルに愛着していると。しかし、このような以前のグルに愛着している弟子は、次のグルにも可愛がられます。

なぜならば、以前のグルをそのように信頼しているわけですから、今ついているグル

に対しても同じように帰依をすることができるだろうからです。逆に以前のグルの悪口を言うような弟子に対しては、グルというものは信頼はなさないものです。

これは荀子の考え方と全く一致しているということができるでしょう。人の世界のものの考え方は、宗教であれ、あるいは政治であれ、あまり変わることがないといえるでしょうね。

❖盤石の安

［荀子、富国］　為名者否、為利者否、為忿者否、則国安于盤石、寿於旗翼。

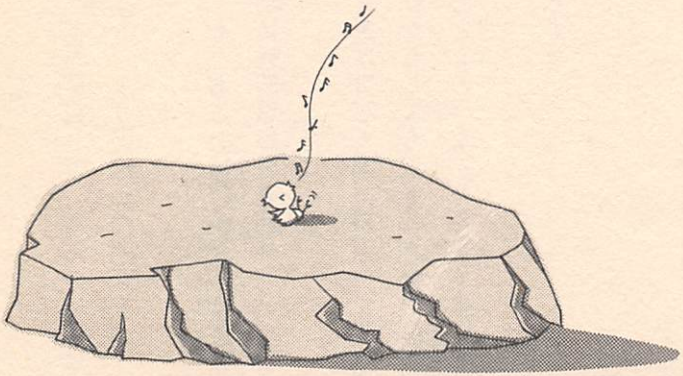
【書き下し文】

名の為にする者否ず、利の為にする者否ず、忿の為にする者も否ざれば、則ち国は盤石よりも安く、旗翼よりも寿し。

【訳】

（仁徳のある人が国家を治め、）名誉のためにする者も攻めてこず、利益のためにする者も攻めてこず、怒りのためにする者も攻めてこないならば、国家は平らで大きな岩よ

りも安定し、旗や翼の星よりも寿命が長くなる。



今日の故事成語は「盤石の安」です。

「盤石の安」とは、平らな安定した岩を指します。そして天に対して、あるいは人に対して慈愛を持つ者が国家を治めたならば、この盤石よりも、より安定した国家をつくることができることを表わしています。

そして、この国家はいかなる方角から攻められたとしても、あるいはいかなる攪乱に対しても安定していることを指します。まさに荀子の大乗仏教的思想の表われということができるでしょう。

わたしも、この考え方には同意見です。なぜならば、君主に対して国民が大いなる信頼を向けているとするならば、いかなる方向から攻められたとしても、それを突き崩すことは不可能だからです。というのは、人というものは心と心のつながりを最も貴いものと考えるからです。

この地上のすべての国が「盤石の安」になったらいいですね。

盤石の安
だめだ!!
どこにも
スキが
ない……!

❖騏驥も一躍に十歩すること能わず

［荀子、勧学］　積土成山、風雨興焉、積水成淵、蛟龍生焉、積善成徳、而神明自得、聖心備焉。故不積蹞歩、無以至千里、不積小流、無以成江海。騏驥一躍、不能十歩、駑馬十駕、功在不舎。

【書き下し文】

積土山を成さば、風雨興り、積水淵を成さば、蛟龍生じ、積善徳を成さば、神明自得し、聖心備わる。故に蹞歩を積まざれば、以て千里に至る無く、小流を積まざれば、以て江海を成す無し。騏驥も一躍に、十歩すること能わず、駑馬も十駕すれば、功舎かざるに在り。

【訳】

土が積もって高い山になると、そこに風雨が起こり、水が集まって深い淵になると、そこに蛟龍（みずち）が住み着くように、人間も善を積み重ねて徳を身につければ、神明（しんめい）が自然と得られ、聖人の心が備わるようになる。

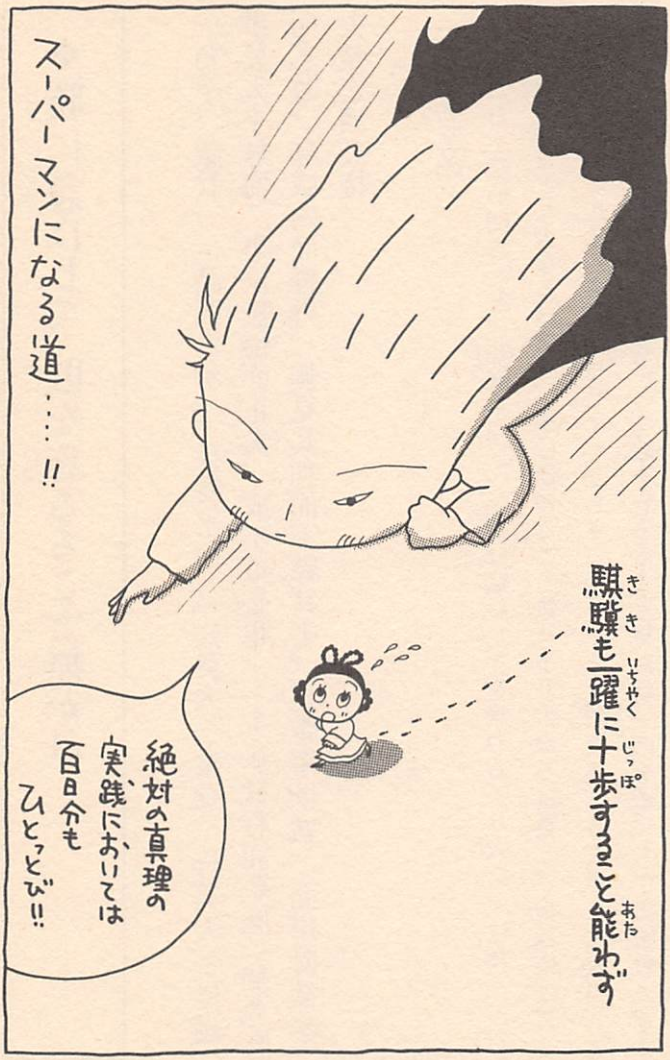
つまり、一歩一歩と積み重ねていかなければ、千里の遠方に行き着くことはできないし、小さな流れの水が集まらなければ、大きな川や海になることはできない。一日に千里を走る駿馬でも、ひと跳びで十歩進むことはできないが、歩みののろい馬でも十日も歩けば、途中でやめないことで仕事の成果があるのだ。

今日の故事成語は「騏驥も一躍に十歩すること能わず」。つまり、どのような名馬だったとしても、あるいは駿馬だとしても、ひとっ跳びに十歩分を駆け抜けることはできないと荀子は説くのです。

しかし、わたしはこの考え方に異論があります。つまり、修行のある段階に来ると、今まで進みののろかった者が飛躍的に現象を動かす力を身につけるようになります。これは明らかに一日を、例えば十日分、あるいは百日分といった形で使えるようになってくるのです。

したがって、確かに学問を土台とし、その教えを着実に実行するという観念的な教えである荀子の考え方を、そのまま実行するとするならば、「騏驥も一躍に十歩すること能わず」というのは正しいといえます。しかし、絶対の真理の実践においては、これが可能となるのです。

あなたは、この観念的な教えを採りますか。それともあなたをスーパーマンに変えてしまう真理の実践を採りますか。それは、あなたがどちらの道に対して縁が深いかによって決まりますね。


スーパーマンになる道……!!
騏驥も一躍に十歩すること能わず
絶対の真理の実践においては百日分もひとっとび!!

❖勝に急にして、敗を忘るること無かれ

「荀子、議兵」「請問為将。」孫卿子曰、「知莫大乎棄疑、行莫大乎無過、事莫大乎無悔。事至無悔而止矣、成不可必也。……無欲将而悪廃。無急勝而忘敗。無威内而軽外。無見其利而不顧其害。凡慮事欲孰、而用財欲泰。夫是之謂五権。」

【書き下し文】

「将たるを請い問う」と。孫卿子曰く、「知は疑わしきを棄つるより大なるは莫く、行いは過ち無きより大なるは莫く、事は悔ゆること無きより大なるは莫し。事は悔ゆること無きに至りて止まるも、成は必すべからざるなり。……将たることを欲して廃せらることを悪む無かれ。勝に急にして敗を忘るること無かれ。内を威にして外を軽んずる

こと無かれ。其の利を見て其の害を顧みざること無かれ。凡そ事を慮るには孰せんことを欲して、財を用いるには泰ならんことを欲す。夫れ是を之れ五権と謂う。」

【訳】

「将軍はどうあるべきかをお尋ねしたい。」

と（孝成王と臨武君は尋ねた）。孫卿子がいうには、

「知識は疑わしい点をなくすことより大きなものはなく、行為は過ちがないことより大きなものはなく、物事は後悔がないことより大きなものはありません。物事は後悔がないことに至るのを究極の目標としますが、成功するかどうかは必ずしも保証できないのです。

……将軍であり続けたいと願って、やめさせられることを嫌がってはなりません。ただ戦いに勝つことだけを急いで、敗れることがあるのを忘れてはなりません。部内の者に威張り散らし、外部の者を軽んじてはなりません。利益ばかりを見て、損害を顧みないことがあってはなりません。何か事を謀るときには熟考することが望ましく、財物を

用いるときにはゆとりのある態度が望ましいのです。そもそも、こういうことを五権というのです。」

【注】

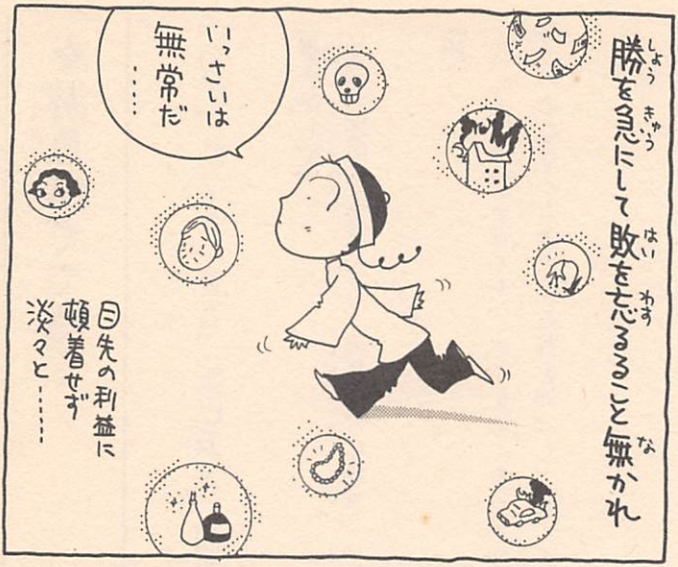
・孝成王――戦国時代、趙の君主。恵文王の子。
・臨武君――戦国時代、楚の将軍。
・孫卿子――荀子のこと。

＊

今日の故事成語は「勝に急にして、敗を忘るること無かれ」です。

これは、勝ちを急ぎすぎて勝つことだけを考え、負けることがあるんだということを忘れてはならないと説く荀子の考え方です。

確かに、この考え方は正しいということができます。わたしたちは、目先の利益だけを追い求め、そして、その利益が得られなかったときの不利益を忘れがちです。これは、事業の失敗、あるいは友人関係の失敗等においても多く見られる現象です。



では、これに対してはどのように対応したらいいのでしょうか。それは、真理の実践の中の寂静の瞑想こそが最高であるということができるでしょう。つまり、すべての現象は無常である。無常とは必ず変化するものである。したがって、それに頓着することなく、淡々と今目の前にある自分が努力しなければならないことに対して集中しなさいと説くこの真理の法が、今日の故事成語を凌駕しているように、わたしには思えます。

さあ、あなたも目先の利益にとらわれず、しっかりと頑張っていただきたいものです。

❖游魚出でて聴く

［荀子、勧学］　昔者、瓠巴鼓瑟、而流魚出聴、伯牙鼓琴、六馬仰秣。

【書き下し文】

昔者、瓠巴瑟を鼓して、流魚出でて聴き、伯牙琴を鼓して、六馬仰いで秣う。

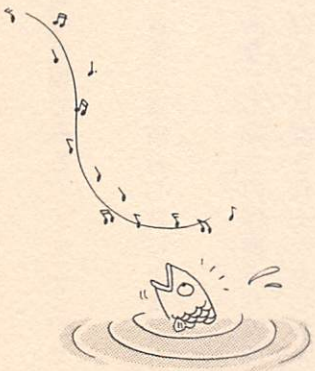
【訳】

昔、瓠巴が瑟を弾くと、水中を泳ぐ魚も水面に出てきて聴きほれ、伯牙が琴を弾くと、天子の車をひく六頭の馬も首を伸ばしてまぐさを食ったという。

【注】

・瓠巴――古代の楚の人。瑟の名手。

・伯牙――春秋時代、楚の人という。琴の名手。

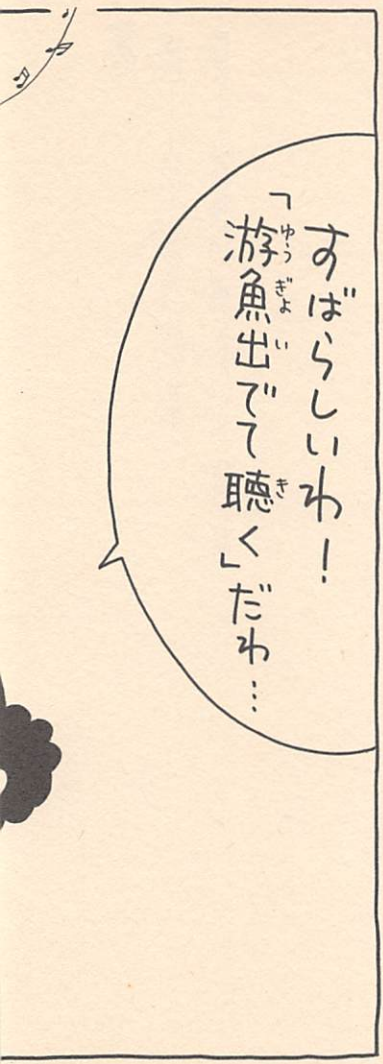


今日の故事成語は「游魚出でて聴く」です。

これは、素晴らしい音楽などを称賛するときなどの最高の表現であるということができるでしょう。

これは、昔中国に瓠巴という琴の名人がいて、その琴の音色の素晴らしさに魚までもが頭を出してその音色を聴いたという内容から来ています。

そしてあなたが、もし「游魚出でて聴く」という言葉をあなたの友人の作曲された曲や、あるいは歌に対して使うならば、あなたもちょっとその人に見直されるかもしれませんね。



游魚出でて聴く

❖君子は物を役し、小人は物に役せらる

「荀子、脩身」　志意脩則驕富貴、道義重則軽王公。内省而外物軽矣。伝曰、「君子役物、小人役於物。」此之謂也。

【書き下し文】

志意脩まれば則ち富貴にも驕り、道義重ければ則ち王公をも軽んず。内に省みて外物軽ければなり。伝に曰く、「君子は物を役し、小人は物に役せらる」と。此を之れ謂うなり。

【訳】

意志が正しく整っていれば、富貴に対しても気後れせず、道義が重く備わっていれば、

王公に対しても恐れることがない。それは、自分の心を省みれば、外界の事物に心を動かされないからである。

古伝にいうには、

「君子は物を支配するが、小人は物に支配される」と。

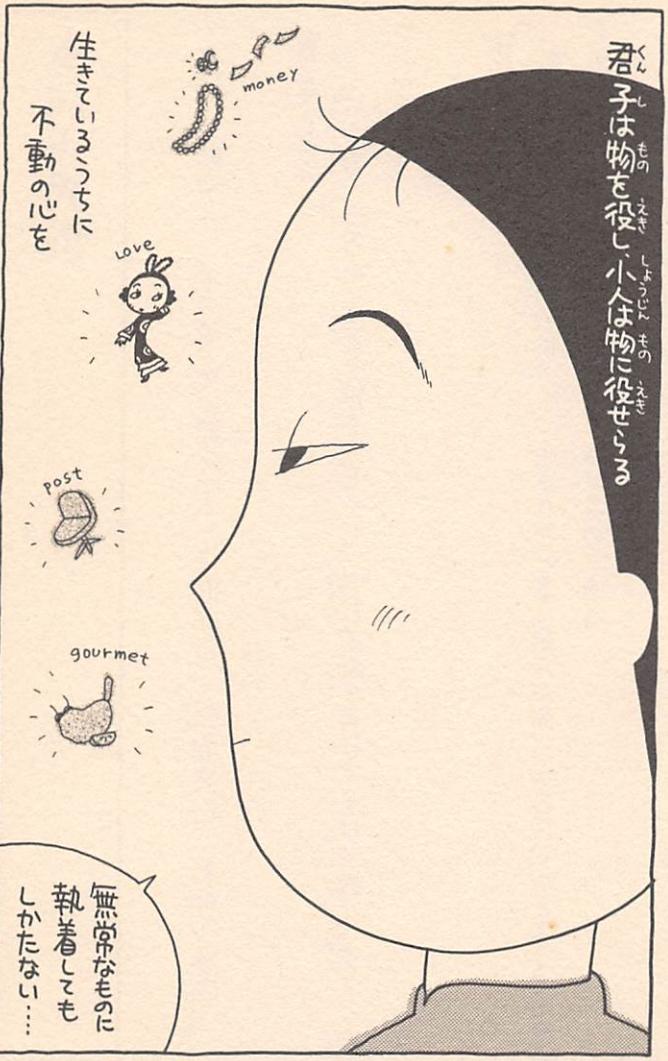
これはこのことを言ったのである。

今日の故事成語は「君子は物を役し、小人は物に役せらる」です。

これは、まさに心と現象との関係を表わしています。つまり、君子というものは自己の心の働きにより、物・権力、あるいは地位・人といったものをコントロールし、逆に小人は人・物・金・権力・地位といったものにコントロールされることを表わしています。

ところで、近ごろの世の中を観察して、果たして、この君子が存在するのでしょうか。いくら国家の権力者になったとしても、わたしにはすべてが小人のようにしか映りません。それは、それらの人たちが権力に奔走し、金に奔走し、物に奔走し、あるいは自分自身の地位に奔走しているからに他ならないからです。

そして、結果的には、これらの情報による心の動きは、わたしたちの死とともに次の再生を決定するのです。したがって、生きているうちに下界の事象に対して心の動かない訓練をすること――、これは、わたしたちに今生だけでなく、来世大きな利益を与えてくれます。まさに、荀子はそれを言い当てたのですね。


君子は物を役し、小人は物に役せらる
money
生きているうちに
不動の心を
Love
post
gourmet
無常なものに
執着しても
しかたない……

❖同声異俗

［荀子、勧学］　干・越・夷・貉之子、生而同声、長而異俗、教使之然也。

【書き下し文】

干・越・夷・貉の子、生れて声を同じくし、長じて俗を異にするは、教え之をして然らしむるなり。

【訳】

呉や越や東夷や北狄の子供でも、生まれたときは産声が同じなのに、成長すると風俗が異なるのは、その後の教育がそうさせるのである。

【注】

・干越夷貉――干、越は国名。干は呉の国のこと。夷は東方の異民族、貉は北方の異民族のこと。

今日の故事成語は「同声異俗」です。

これは、人は生まれるときの産声は同じであるが、その風俗や教育、あるいは環境、父母等によって、そのうち変化することを表わしています。

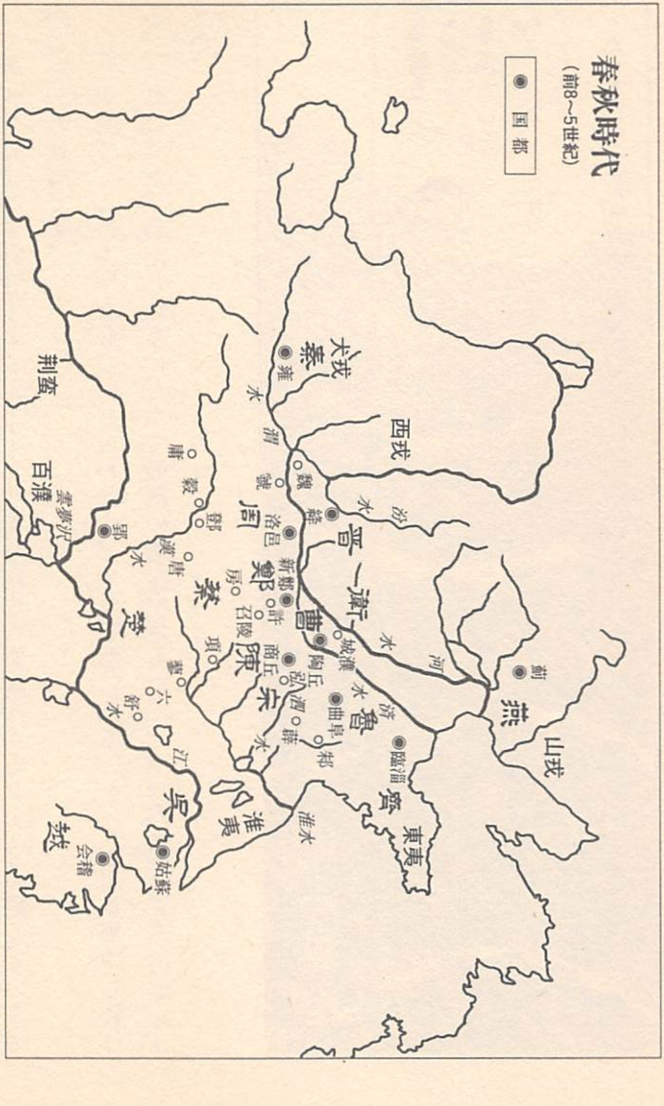
しかし、わたしに言わせると、この「同声異俗」については大きな疑問があります。例えば、今から二千五百年前に登場したサキャ神賢と、それから普通の人とでは、果たして同じ産声を上げたのでしょうか。あるいは、キリスト、そして普通の人との関係はどうだったのでしょうか。

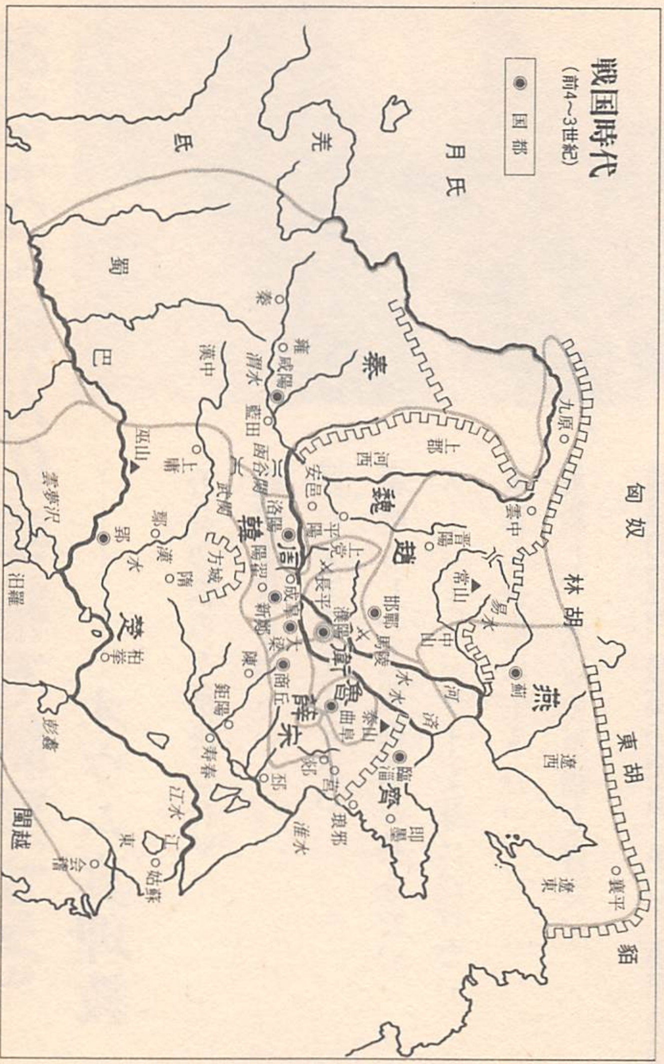
この荀子の考え方には、前生という考え方がないように思われます。もともとわたしたちは生まれつき違いがあります。したがって、「同声」とはいえないのです。しかし、スタート地点は違っても、今生の教育、環境、あるいは師、つまり先生等によって、わたしたちの人生は大きく好転させることができることは事実です。ただし、それはあくまでも生まれたときの条件に加えられるだけであるということを忘れてなりません。

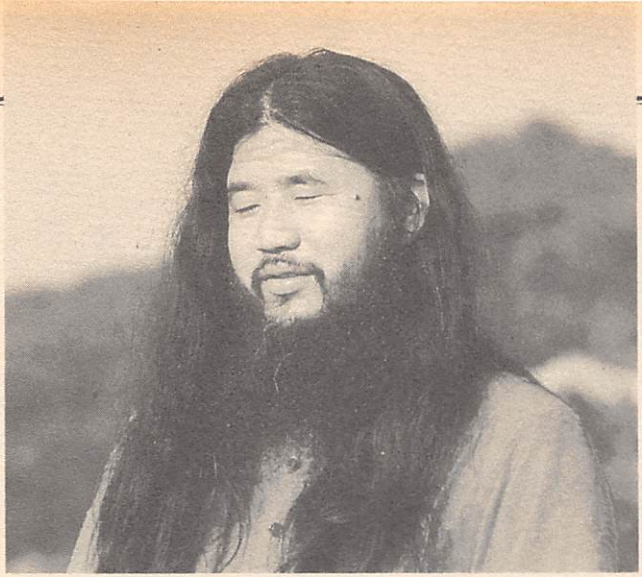
では、前生までのわたしたちの功徳と、それから今生生まれてから形成される教育や、あるいは先生等の影響はどうなのかという問題があります。これについては、それもす

べてカルマによって存在するんだ――、つまり前生の影響がかなり大きく働くというのがわたしの見解です。

したがって、このようなものにとらわれず、今目の前にあることに努力を集中し続ける。これこそが、わたしたちにとって最高の道を生きるただ一つの方法ではないのでしょうか。


春秋時代
（前8～5世紀）
◉ 国都
犬戎
秦
雍
渭水
西戎
汾水
魏
虢
晋
絳
周
洛邑
衛
鄭
新鄭
蔡
許
召陵
曹
陶丘
商丘
宋
陳
魯
曲阜
斉
臨淄
燕
薊
山戎
東夷
淮夷
淮水
楚
郢
雲夢沢
百濮
荊蛮
呉
姑蘇
越
会稽
河水
済水
泗水
江
六
舒
項
唐
鄧


戦国時代
(前4～3世紀)
国都
匈奴
林胡
東胡
燕
薊
遼西
遼東
襄平
貊
九原
雲中
上郡
河西
魏
趙
晋陽
常山
中山
易水
邯鄲
秦
咸陽
雍
渭水
藍田
函谷関
安邑
洛陽
韓
周
平陽
上党
長平
成皋
新鄭
大梁
濮陽
衛
馬陵
魯
曲阜
泰山
斉
臨淄
即墨
琅邪
莒
宋
薛
商丘
陳
鉅陽
寿春
楚
郢
鄢
漢水
随
方城
武関
上庸
巫山
漢中
巴
蜀
氐
羌
月氏
汨羅
彭蠡
雲夢沢
江水
淮水
閩越
会稽
姑蘇
済水
河



あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

もりもり
智慧のわく書 4
資料請求券

ズバリ！真理のメッセージ
リオン・テス・バシレイアス」

中波　1476kHz　毎日22:15～　1:15
短波　英語放送（朝）毎日　5:30～　6:00
　　（昼）毎日　1:30～　2:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介。
便利なテレホンサービスもぜひご利用を。
TEL 03(5450)3602

※タイアップマガジン

定期購読受付中！
「えんじょい・はぴねす」

※詳しいお問い合わせは、
「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 0544(54)1257

モスクワからあなたに——
オウム真理教放送「エウアンゲ

尊師の声が あなたの耳を直撃！

麻原尊師が電波にのってあなたのもとへ。
宗教、音楽、科学、神秘……。
盛りだくさんの内容と、
次から次への新しい発見で
眠気も吹っ飛ぶこの時間！
さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！

"オウム真理教ネット"

※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント(えんじょいはぴねす最新号)をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17

"オウム真理教ネット" 事務局 TEL 03-5450-3554

好評！あなたとオウムをつなぐ
パソコン通信、

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5450-5580（4回線） Tri-P利用可能（CXAUMNET）
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

めんどうな手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098(869)7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
高崎支部　0273(46)1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町 下稲荷前1081-5
福井支部　0776 (26) 6145
〒910　福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
松本支部　0263(28)7429
〒399　長野県松本市芳川野溝527-3
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部
(AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　7-095-455-95-32
Kindergarten No.468, 32A Petrozavodskaya ul. Moscow, 125475
Russia

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『もりもり智慧のわく書』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『もりもり智慧のわく書』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部　03(5467)2745
〒107　東京都港区南青山7-5-12 マハーポーシャビル2F・3F
世田谷道場　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
杉並道場 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F

❖

1993年5月10日・初版発行

定　価――― 550円
著　者――― 真理の御魂(みたま) 最聖 麻原彰晃尊師
発行者――― 松本知子
　　石井久子
発　行――― 株式会社オウム
　　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
　　ＴＥＬ　03(3439)6043
　　振　替　東京２－109325
※乱丁・落丁はお取り替えいたします

©His Holiness the Master, Shoko Asahara 1993
ISBN4-87142-076-0　C7098　P550E

もっと知恵のわくまき4.

◉荀子編②

ISBN4-87142-076-0 C7098 P550E 定価550円(本体534円)